

明治の近代化に異議を 申し立てる「猫」

～「吾輩は猫である」を読む～

三 浦 良

2012 年 12 月 9 日



猫 塚

早稲田の漱石山房跡に「猫塚」が立っている。しかしこれは漱石が実際に建てた墓でない。誰が建てかはわからないがいつのまにか建てられたと説明書きがあった。小説では猫は飲み残しのビールを飲み足を踏み外して甕へ落ちて死んでしまうが、モデルとなった夏目家の黒猫はまだ元気で、漱石が早稲田へ転居した翌年M41年9月13日に亡くなった。ミカン箱へ入れて書斎裏の桜の木の下へ埋め、「この下に稲妻起こる宵あらん」と書いた小さな墓標を立てた。その後文鳥が埋められ、犬も埋められた。子どもたちが金魚も埋めたので、そこは生き物の墓場になってしまったため、猫の十三回忌に九重の石の供養塔を建てた、と鏡子夫人が言っている。この猫塚は11段もあるので当初のものと異なるが、漱石が建てた雰囲気は十分伝わっている。

目 次

はじめに	4
1 「猫」ブーム	5
2 神経衰弱に苦しむ最中に書かれた「猫」	8
3 猫の目線	
(1) 夏目家へ迷い込んだ福猫	11
(2) 苦沙弥先生は「教養が何の役に立つか？」を悩み続けた人	13
(3) 「太平の逸民」から拝金主義者まで多彩な人物が登場	15
(4) 明治時代の庶民の日常生活	18
4 大学の先生が書いたユーモラス小説	
(1) 明治時代は猛烈な立身出世主義の時代だった	23
(2) 漱石は持っていた立身出世カードを全部捨てて小説家になった人	24
5 精神的向上心あふれる「太平の逸民」たちの異議申し立て	
(1) 西洋かぶれを徹底的に批判	29
(2) お金に物を言わせ偉ぶる俗物批判	31
(3) 「猫」の背後に日露戦争	33
(4) 文明化しても心の平安が得られない人々	37
(5) 「猫」の異議申し立て	39

はじめに

夏目漱石の「吾輩は猫である」(以下「猫」と略す。)は、文明中学校の英語教師^{ちんのくしやみ}珍野苦沙弥の家へ迷い込んできた捨て猫の口を借りて、苦沙弥がお金にものを言わせて物事を思い通りに進める拝金主義者・金田鼻子を新しい文明社会が生んだ俗物とみて激しく批判する。他方、金田鼻子を批判する苦沙弥たちインテリも新しい文明社会の落とし子のような人々に過ぎず彼らを「太平の逸民」と呼んで笑い飛ばす。このように猫の批評や観察が人をひきつける文明批判の書として読むのが現代の「猫」論の定説である。

これに対して私は、この論文で「猫」がなぜ面白いか?という疑問を出発点にして、もう一度「猫」が書かれた当時に自分を置いて「猫」を読み直し、「猫」をその歴史的文化的背景の中で改めて位置づけてみたいと考えた。「面白い」という言葉は、笑える話から始まってびっくりする話、深い話、うまい話、いい話、感動し泣ける話、ほっこりする話、切ない話、悲しい話、怖い話までかなり多義的に用いられている。そしてこれらを共通するのは、ワクワク、ドキドキさせて読者の急所をズバリ押えてその好奇心をそそる感覚である。「猫」を読むに当たり、私はそれを「おかしくて笑える話」とセットになっている「知的好奇心を高める話」と定義し直して分析する。

「猫」は何といってもまず笑いに満ちた小説である。そして、「太平の逸民」たちが繰り広げる会話や騒動には膨大な情報が含まれていて、そこには今日の我々が直面している諸問題や回答が隠されているように思われる。例えば、最終章で「太平の逸民」たちの大会議が始まると、これからの人は皆探偵になって最後は自殺へ走るという近代人の病理問題にも言及し、今日でもなお議論が続く近代文明上の課題を取り上げる。このように「猫」には我々の想像力をかきたてる素材が詰まっているので、読者はそれを読み直すたびに驚きや再発見を見出して飽きることがない。

そこで本論文では、定説と同じく「猫」をジョーク一杯の愉快小説として読みつつ、そのジョークの向こう側に垣間見える時代の真実を指摘する小説として読み直してみる。明治維新から高々30余年しかたっていないのに、多くの人々が日露戦争の勝利に浮かれて我を忘れ、金田夫妻のような金持ちが偉ぶって大手を振って歩く社会に変わってきた。そこで、この拝金主義を正面から取り上げた「猫」の面白さの一つは明治の近代文明の受容に対する漱石の異議申し立ての物語ではないだろうかという仮説を立てて、「猫」で漱石が格闘した時代の真実を探すことにする。何故か。漱石が生きた時代の延長線上に我々が生きてい

るという意味で、漱石の時代の真実を今日の我々もまたも引きずっていて、漱石の異議申し立ては未解決のままで今なお有効性を持ち続けている指摘と考えるからである。

1 「猫」ブーム

M38 年（1905 年）、俳句同人誌「ホトトギス」1 月号に漱石の処女作「吾輩は猫である」が掲載されると、たちまち世間に大きな評判を呼んだ。その様子を内田百閒^{うちだひゃっけん}は次のように述べて、内田自身も当時岡山中学 4 年生だったが、漱石人氣が「旭日昇天の勢い」で高まり、自分もたちまち漱石崇拜者になったと告白している。

当時の人氣は今日の若い人たちの想像に及ばないほどであります。「ねこ」がユーモアの作品だからその作者の漱石というのはどんな親父かと漱石を付回して尾行する人も出てきたようです。・・・先生を尾行して漱石が何をするかを調べて雑誌に投書する。・・・先生が風呂へ行かれると一緒に風呂屋へ入って行って風呂へつかる。先生が湯槽から上がってお尻を三遍叩いた。カンカンに乗って目方を計った。帰り道に近所の文房具屋で一帖だったか百枚だったかの紙を 6 銭で買ったというようなことまで報告する。世間から人氣があったというだけでなく、なんだか気にかかる作者であって、尊敬もせられまた好奇の目で見られていたやうであります。¹

「猫」の驚くほどの売れ行き、「猫」をもじったパロディーの流行、人々の好意的な反響によって「猫」ブームが引き起こされた。しかし、漱石にとってみれば「猫」は確かに処女作ではあったが、十分な事前準備をして書き上げたものではなかった。むしろ、当時、一向に改善しない神経衰弱に悩む漱石に何か文章でも書いてみたらどうかと俳句仲間の高浜虚子に勧められて書き出したに過ぎないものだった。虚子はその経緯を次のように述べている。漱石自身も「猫」を振り返り、当時は小説家になろうという気持ちもなしに虚心坦懐な気持ちで日常生活を描いたと言う。

（「猫」が発表されると）大変な反響を起こして評判になりました。それというのも、大学の先生である夏目漱石なるものが小説を書いたということで、その時分は大学の先生というものは、いわゆる象牙の塔に籠っていて、なかなか小説などは書くものではないという考えがあったのでありますが、それが小説を書いたと言うので、著しく世人の目をそばだたしめたものでありました。そればかりでなく、世間にある文章とは類を異にしたところからして、非常な評判になったのでありました。・・・（「猫」の発表を機に）漱石の生活が一転化し、気分も一転化するというような傾きになってきたのであります。・・・「猫」が大変好評を博したものですから、それは 1 年と 8 カ月続きまして、続々と続編を書く、しかもその続編は第 1 篇よりもはるかに長いものを書いて、「ホトトギス」はほとんどその「猫」で埋まってしまうというような勢いになりました。それがために「ホトトギス」もぐんぐ

¹ 内田百閒「漱石雑感」（ちくま文庫「私の漱石と龍之介」2006 年、所収）

んと毎号部数が増していくというような勢いでありました。²

私の処女作といえはまず「猫」だろうが、・ ・ ・ただ偶然ああいうものが出来た。・ ・ ・生きているから何かしなければならぬ。する以上は、自己の存在を確実にしここに個人があるということを他にも知らせねばならぬ位の見解は、常人と同じように持っていたかもしれぬ。けれども創作の方面で自己を発揮しようとは、創作をやる前までも別段考えていなかった。³

漱石自身は淡々と書いた小説と言うが、「猫」には多くの仕掛けがある。

（不思議な体験）

- ・ 土手三番町の首くくりの松で首をくくろうとして来てみると一足違いで別の人が首をつっていたという迷亭の話。
- ・ 吾妻橋の欄干から下を見ると、水の中からさる令嬢が呼ぶ声がする。フラフラと自分も水に飛び込むが、気が付くと水の方でなく橋の真ん中へ飛び下りていたという寒月の話。
- ・ 夫人にせがまれて浄瑠璃を聞きに行くことになったが、いざ出かけようとする段になったら急に悪寒が走り行くべき時間が過ぎてしまったらケロリと直ったという苦沙弥の話。
- ・ 冬の越後蒲原郡蛸壺峠の一軒家で蛇飯のごちそうを頂いて、その家の美しい娘にドキドキする。しかし翌朝、その娘が実はカツラをつけたヤカン頭だったことを発見して幻滅した迷亭の話。

（言葉遊びやシャレが飛び交うインテリたちの会話）

迷亭が苦沙弥にイタリアの画家「アンドレア・デル・サルト」が絵をかくなら自然を写せと言った名言があると教える話や迷亭が東風と一緒にいったレストランで「トチメンボー」を注文してボーイを困らす話がある。後の章で詳しく述べるが、いずれも言葉遊びをしながら知ったかぶりで西洋崇拜する人たちに対する批判例である。また、その後のことだが、ドロボーに入られた苦沙弥家へ警官が来て被害状況を聞かれて、苦沙弥が山芋の法外な値段をいうので夫人がそんなに高くないと間を入れる。苦沙弥は夫人が正確な値段も知らない気付くと、夫人を「オタンチン・パレオロガス」といって罵る。江戸の俗語のオタンチン（間抜け）を東ローマ帝国最後の皇帝コンスタンチン・パレオロガスにかけた洒落言葉だが、夫人は自分のハゲを指す言葉ではないかと疑って繰り返して苦沙弥にその意味を尋ねるが笑って答えない。その駆け引きが落語のように可笑しい。

（苦沙弥先生の日常生活）

性悪な牡蠣のように書斎に張り付いて牡蠣的人生を歩むのが苦沙弥である。実績もないのに達観したようなつら構え。2, 3 ページも読めばすぐ眠くなるような読書。日記、水

² 高浜虚子「俳句の50年」（角川文庫「吾輩は猫である」H24年版、所収）

³ 夏目漱石「処女作追懐談」（角川版「吾輩は猫である」H24年5月、所収）

彩画、謡など何をしてものにならずやがてあきらめて投げだす性格。胃弱でタカジアスターゼにすぎる弱い体。よだれを垂らしてする昼寝が日課。自分一人で気に病むアバタ顔。金銭感覚の乏しさ、などを猫は次々と暴露する。こうした苦沙弥の俗物性、弱点が苦沙弥の超然ぶりと表裏一体となって次々と現れるのが面白い。しかも苦沙弥は漱石の分身の面もあるので、漱石自身を嘲笑の対象にしてふざけているようにも見える。

（笑いの影に見え隠れする日露戦争）

おりしもこの時代は、前年の 2 月に始まった日露戦争で、日本軍が旅順を攻略し大いに勢いついた時期である。日本が奇跡的に目の上のこぶだった大国ロシアに勝利し、その勝った勢いで長い間鬱積していた恐露病を一気に反転爆発させ、一流国になったといつて大和魂を振りかざす風潮を引き起こした。漱石は、そうした当時の世相に不条理な精神主義の匂いを感じ取り、ニヒルな表情で警鐘を鳴らしている。猫が生み出すジョークやユーモアを喜ぶ大衆のなかには、その笑いの裏に見え隠れする別の匂いをかぎ取っていた人たちもいた。その匂いは、ある時は日露戦争であり、ある時は戦勝気分の陰で進められていた軍国主義の影であり、また或る時は急速に進む近代化に対する時局追随主義であり、また或る時は近代化ですすむ個人主義のものの考え方への恐怖心であり、また失った心の平安の行き先だった。

「猫」の面白さは各章ごとに設けられた仕掛けから生まれている。その仕掛けは、まず当時の人々の日常生活、次に苦沙弥という堅物一方の人物の超然ぶりと俗物ぶりが混然一体となった生き方、さらに明治のインテリたちのおしゃべり、である。これらの仕掛けが作り出す驚きから笑いが生まれている。だから、「猫ブーム」の根源は、漱石が描いた明治の人々の日常生活に対する驚き、堅物の典型のように見える大学の先生に対する驚き、明治時代の高等遊民と呼ばれたインテリたちに対する驚き、にあったと解釈することも出来そうである。

そこで以下、漱石が設けた仕掛けとそれが作り出す驚きを次の三点に整理して分析する。

- 第 1、「猫の目線」で再現された明治時代の人々の日常生活から生まれる驚き。
- 第 2、象牙の塔にこもる大学の先生がユーモラスな小説を書いた驚き。
- 第 3、精神的向上心をもった明治の高等遊民たちの会話から生まれる驚き。

2 神経衰弱に苦しむ最中に書かれた「猫」

「猫」ブームを巻き起こした「面白さ」の分析に入る前に、神経衰弱に苦しむ漱石が突然「猫」を書くに至った経緯とその背景、「猫」を書くことが神経衰弱の自己治療になったという思いがけない影響について検討する。

「猫」を書いた直接の動機は、すでに述べたように俳句仲間の高浜虚子の勧めだった。だからきっかけは偶然で、突然もの書きが始まった、とその頃のことを鏡子夫人は次のように振り返る。

この年（M37 年）の暮れ頃からどう気が向いたものか、突然ものを書き始めました。「ホトトギス」の正月号に「猫」第 1 回、「帝国文学」の正月号に「倫敦塔」、「学燈」に「カーライル博物館」といった具合に続けざまに書きました。・・・別に本職に小説を書くという気もなかったところへ、長い間書きたくて書きたくて堪らないのをこらえていた形だったので、書き出せばほとんど一気呵成に続けざまに書いたようです。・・・書いているのを見ているといかにも楽しそうで、夜なんぞも一番遅くて 12 時、1 時ころで、たいがいは学校から帰ってきて、夕食前後 10 時ころまでに苦もなく書いてしまう有様でした。⁴

その鏡子夫人によれば、英国から帰国後の漱石の神経衰弱は最悪な状態が続いていた。

M36 年 1 月 28 日 帰国。神戸經由新橋着、新宿矢来町の鏡子夫人の実家へ仮住まい。

3 月 本郷千駄木へ引越し。五高を依願免官。

4 月 一高教授に就任、文科大学講師を兼任。文学形式論を講義

7 月 神経衰弱が昂じて 2 ヶ月間別居

9 月 文学論を講義

10 月 3 女栄子誕生

11 月 神経衰弱再び悪化、離縁の手紙

M37 年 4 月 明大講師を兼任。症状が小康状態になる。

6～7 月 捨てられて家に入ってきた生後間もない黒猫を飼う。

夏頃 症状再発。

12 月 「猫」を執筆

⁴ 夏目鏡子「漱石の思い出」 p p 158—159（文春文庫、2006 年 7 月）

M36年6月頃から激しい神経衰弱の発作が始まった。鏡子夫人はお腹の子供への影響を心配して7月から約2ヵ月間実家へ戻って別居する。9月の3女栄子の出産を機に再び夏目家へ戻る。10月頃から再び激しい発作が起きるが、今度は再び別居しようと考えなかった。その様子を鏡子夫人の「漱石の思い出」から抜粋してみる。⁵

- ・夜中に癇癪を起し手当たりしだいに物を投げつける、子どもが泣くといって怒り出す。
- ・自分一人で怒りだし当たり散らす。女中を追い出してしまう。しきりに里へ帰れという。産褥中の鏡子夫人を実家へ戻す旨の手紙を郵送。しかし実家側で取り上げないので婦人に様々な悪態をつく。
- ・3歳の次女をいじめる。
- ・出勤時に洋服を着せようとするのであっちへ行っていると怒鳴りつける。
- ・生活費を渡さず、何度もお金をくれというといきなり一円札を投げつける。タバコが切れたといって煙草盆を投げつける。時計が止まっているといって懐中時計を投げつける。
- ・夫人を実家へ帰すと再三言うので父が説得にきて置いてやってくれといって帰ると、親父が不人情で自分を気狂いと思って相手にしないと怒る。離縁状を書いて実家へ持って行けとか、お歳暮や年始に実家へ行けといって追い出しを繰り返す。
- ・夜中に雨戸をあけて庭へ飛び出す。夜中に書斎で暴れる。夜中に食事が欲しいというので作って持っていくが箸をつけない。夕食時に子どもが歌を歌うとうるさいといって御膳をひっくり返してしまう。
- ・向いの下宿の学生を自分を調べる探偵だと勘違いし「探偵君」と呼んでからかう。
- ・庭へボールを投げ込んだ中学生を捕まえて学校へ怒鳴り込む。

最悪な状態だったが、それでも翌年の37年4月頃から症状が改善し、段々と無茶な事はしなくなってきた。ただ、良くなったとはいえ小康状態になった程度で、37, 38, 39年頃は一進一退の状態が続いた。本当によくなったのは40年に早稲田へ引越してからだった。

さて、江藤淳が漱石がひどい神経衰弱に陥った原因を次のように述べている。

漱石はロンドンに行くまでは、イギリスの英文学者と対等に競争できる英文学者になれると思っていた。多くの他の明治人がそうしたように、彼もまた英文学研究分野で西洋人と競争し彼らをしのいで日本の国威を世界に発揚せねばならぬ、と考えていた。英国の英文学者をしのぐ研究実績を上げようと考えていた彼がロンドンで向き合った現実はその思いを粉々身砕くものだった。文学は言葉の芸術だから英語国民の研究家に劣らない頭脳だけでは不足、言葉に対する鋭い感受性も必要だった。英語に対する細やかな語感という重要な要件を欠いていることを実感した漱石は、本場の英文学研究者には追いつけないと感じ、たちまちのうちに目標を見失ってしまった。自分の無能力に気づき、英文学研究を通じて国に貢献できない、何のために生きているか分からない状況に追い込まれて彼は神経衰弱にかかった。⁶

⁵ *Ibid.*, 「漱石の思い出」 p p 125-149

⁶ 江藤淳「漱石生誕百周年記念講演」 p p 371-373 (新潮文庫「決定版夏目漱石」H23年9月、所収)

明治の秀才がロンドンで英文学を日本人が研究することの無力さにさいなまれ、鏡子夫人らの家族からも切り離されてひどい孤立感を体験する。政府から派遣された研究留学生が研究に行き詰まり、自分を留学させてくれた国家に対する貢献も出来ないといってロンドンの街中で立ち往生していたのだ。英文学研究もほとんどできないまま帰国し、帰国後には東大の英文学教授になる予定という大きな責任に押しつぶされた。

こうしてみると、漱石はもともと大学を卒業して松山へ行く頃から英文学をやったことが失敗だったと思っていたのに、行きたくもないロンドンまで行くことになった。行った挙句に、イギリスは西洋文明の代表のような国でそれに対して日本はあまりにも弱小だったという格差の大きさに打ちのめされてしまう。そして漱石はイギリスに対して大きな劣等感をおぼえて専門の英文学を見捨てざるを得ないと考えようになる。しかし、漱石にしてみれば、イギリスと縁切りして英文学を捨ててしまうなどと言うことが本当に出来るか。大学では英文学講座の後任者として期待されているし、捨ててしまった後どこへ向かおうとしているかも見えていない。さらに、留学費用を文部省が負担したため帰国後 4 年間は教壇から離れることもできない。こうした重大な人生上の迷路にはまり込んで学者としての自信をすっかり喪失した漱石は、一層神経衰弱を悪化させてしまった。大学で講義をしていても医学部の実験用の犬が吠える声が神経に触って仕方がない。家へ帰ってからも癩癩を起こしてばかりの日々が続く。

しかしM37 年暮れごろから「猫」を書き出すことでその迷いから立ち直り始める。英文学の世界から離れて子どものころから好きだった江戸落語や南画世界に浸りながら「猫」を書く。「猫」が多くの人々に読まれて、好意的な反響を身近に感じる。人々から褒められ慰められる体験によって、漱石は孤独感から回復し始めたように見える。学者生活では漱石の孤独は深まる一方だったが、小説を書くことで神経衰弱の原因の自信喪失感から少しづつ解放されて、見失っていた自己意識あるいは自我意識を回復し始めた。それでも彼が神経衰弱を完治させるためには人々をアッと驚かせる大きな決断が必要だった。「猫」の後「坊ちゃん」、「草枕」を立て続けに書きあげて世間の評判も高まる一方になった。鏡子夫人は先の引用に続けて、その時の漱石は、傍で見ても原稿用紙に向かうと直ちに小説が出来上がってくると言えるほど張りきっていたと言う。この時の漱石は小説を書くことで創作の楽しさを心底から実感していたと思われる。この感動が学者生活で道に迷っていた漱石にきっぱりと英文学研究を絶縁して小説家になる決意をさせたと考ええる。

私たちは後で、漱石という人は明治時代の立身出世主義が蔓延した時代に立身出世のカードを全部持っていた超エリートだったが、やがてそのカードを全部捨ててしまった人だったことに言及するが、漱石にそこまで決意させて実行させた強靱な自己意識がこの神経衰弱の経験から醸成されて形作られてきたものだったことも指摘しておきたい。しかし、今、

我々が考察している「猫」を書き始めたばかりの段階の漱石は、神経衰弱で毎日癩癩ばかりを起こす不幸な日々を送っていた。

3 猫の目線

(1) 夏目家へ迷い込んだ福猫

漱石は「猫」という小説は偶然に出来ただものだったと言っている（「処女作追懷談」）。たまたま「猫」が書かれたという話は、ある日たまたま黒猫が夏目家迷い込んできた話とよく似ている。この黒猫が夏目家で大いに人気者で、漱石自身もよく猫の観察をしていることからみても神経衰弱で苦しんでいた漱石の心を慰めていたように見える。

（M37年の）夏の始め頃かと覚えております。どこからともなく生まれて幾らもたたない子猫が家の中に入ってきました・・・どんなに外へ放り出しても家の中へ戻ってきて、とうとう漱石自身が、そんなに入ってくるなら置いてやればいいじゃないかといって飼猫になった。飼ってみれば、この猫はずいぶん可愛かったと見えて、お櫃の上に乗し、新聞を読んでいる漱石の背中で休む、子どもと遊んで引っ掻いたりして、家族の人気者だった。小説にも登場するが、ある時は子どもが食べ残したお雑煮のもちを食べて咽喉につまり前足でもがきながら踊りをしたこともあった。⁷

これに続けて、鏡子夫人がこの猫のエピソードを紹介している。よく家に来るあん摩のおばあさんが、この猫を見て、全身黒ずんだ灰色の中に虎斑があり、爪の先まで黒い。だからこれは珍しい福猫で、飼っているとお家が繁盛すると言う、そういわれて家族中の人たちが嬉しくなり、猫を可愛がるようになった、と。

可愛がるうちに漱石は猫の奇妙な魅力に気付く。誰でも猫が部屋の奥に座って澄んだ目でジーと我々を見つめられると、なんだか心の奥底を猫に見透かされているような気分になることがあるだろう。漱石も猫に見つめられて、猫に人間的な判断能力などあるはずもないのに、しばしば猫のうかがい知れない洞察力を感じただろう。家族中の愛を受けて楽しそうに家内を遊びまわる福猫が、小康状態とはいえ神経衰弱で悩んでいた漱石の気持ちを和らげたのだろう。その猫の目で自分の家庭の様子を覗かせてみる、猫に友人たちとの会話や自分が普段考えていることや批判などを語らせてみたらどういうことになるか、と漱石は何度も考えていたのだろうと想像するのである。

「猫」は、猫による人間生活の観察報告の形をとっている。苦沙弥は漱石の日常生活を映す分身だが、語り手の猫もまた、作者の漱石の下で飼い主に似せて言葉を使う漱石の分身である。その光景はあたかも、漱石がこれまでいた英文学研究という学者世界から離脱し

⁷ Ibid., 「漱石の思い出」 p p 151-152

て、一方で中学校教師の苦沙弥となり他方で捨てられた猫となって現実の俗世間の世界に入ってきたようにみえる。それまでは懷手で座布団に座っていた漱石が一念発起して、利害が輻輳する俗世間へ降りてきて、そこに住む人々の間を動きまわるようになる。この漱石こそ、鏡子夫人が言っているように、肩肘張った生活をやめて素直な気持ちで創作の世界に入った姿だった。彼は「猫」の創作活動をすることで、同時に悪化した神経衰弱についても自己治療を行っていたと思われる。

漱石はその新しい世界を猫の目線で描く。「猫」はまだ無名の猫だが、自分のことを「吾輩」と言って尊大な語り手として登場する。猫の世界も自分のような高等遊民の心意気をもつ猫の他に、乱暴でワルだが目がきれいで真っ直ぐな心をもった車屋の黒、二弦琴のお師匠さんの家のお嬢様育ちの三毛子など多彩な猫がいて、人間世界と同じようだと思わせる。また、猫の身軽さを利用して二弦琴のお師匠さんの家や資産家の金田家へ自在に出かけて行って話を聞くことが出来る。それ以外にも、ある時は銭湯見物に出かけて行って、人々が裸で湯槽、洗い場、脱衣所にいる様子をみて一大奇観だと紹介する。

始め読者は吾輩が一方的に提供する情報の聞き役に落とし込まれたような気分になる。しかし、すぐにそうした役回りは冒頭だけだと気付く。この語り手は先へ行くと、繰り返す「猫ながら…」「猫にくせに…」と言って猫を軽蔑する読者を強く意識した言い方をするようになって、読者と語り手＝猫が対等の立場に立つようになる。

ちょっと読者に断っておきたいが、元来人間が何ぞと言うと猫々と、事もなげに軽侮の口調をもって吾輩を評価する癖があるのはよくない⁸。

語り手が読者と一緒になって語りあい、猫の目線で見た人間観察を双方で笑い飛ばしながら楽しんでいる。著者の漱石は隠れており、漱石が解き放った第一の分身の猫が小説全体のコンダクター（案内人）になり、第二の分身である苦沙弥の愉快的動きを追いかけているように見える。無名の猫は、一面で書き手の漱石の意を受けたストーリーテラーの任務を負いつつ、他面で猫ながら「読心術」を使って人の心まで見通すことが出来る能力をもって小説中を縦横無尽に活躍する。

また、この猫は作者を代理するコンダクターという高い地位にしながら、自身が主人公になっていくつかの失敗を繰り返す間抜けな隣のおじさんのような人間臭い面ももっている。食べ残しの餅を盗み食いして餅を咽喉に詰まらせて猫踊りをするような間抜けなこともする。また、猫の運動と称してカラスの追い払いやネズミ捕りにも挑むがことごとく失敗する。また或る日には、蟪蛄狩りや蟬取りもする。松滑りではごつごつした幹を頭を下にむ

⁸ 「漱石全集」第1巻（岩波書店、S49年12月）、第2章p24

けて駆け下りるのが得意だと言って自慢する

(2) 苦沙弥先生は「教養が何の役に立つか？」の疑問を悩み続けた人

猫は苦沙弥の家の中ばかりに留まってばかりいるわけではない。猫は自由自在に動き回り、小説の舞台を簡単に変えることが出来る。各場面ごとに多彩な人物が登場して、そこで猫が自分を吾輩と言いながら、交わされる会話や人々の行動をシニカルな目線で観察する。その様子をみていると、苦沙弥はその登場人物の一人に過ぎなくなっている。だからこの小説の主人公は猫で、苦沙弥は主要な登場人物の一人であるように見える。しかし、猫が小説を進めるコンダクターとみれば、苦沙弥が主人公になる。

珍野苦沙弥は、言うまでもなくこの家の主人。文明中学校の英語のリーダーの教師。学校から帰ると終日書斎に入って動かない。書斎にへばりついて「蝸的人生」を送っていると揶揄されるほどである。勉強家に見えるが実際はそこで良く昼寝する。彼は俳句、詩、英文、弓、バイオリンなど何でも手を出す、ものになったものは一つもない。そのくせ熱心で、便所で謡をうたうが、しつこいので近所で後架先生とあだ名で呼ばれるほどだ。最近水彩画をやりだしたがうまく描けない。

小説の始めに、初対面の車屋の黒と吾輩の会話がある⁹。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに決まっていあらあな。おめえのうちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

.....

「・・・しかし、家は教師のほうが車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

「べらぼうめ、家なんかいくら大きく立って腹の足しになるものか」

このやり取りは二重の意味で笑える。

一つは会話の中でよくある「ちぐはぐなやり取り」である。「偉い」のはどっちかと聞くと「車屋の方が強い」といい、「家の大きさ＝お金持ち」はどっちかと聞くと「腹の足し」にならないと、ちぐはぐなやり取りをするのが可笑しい。

二つ目は、「(金田家から帰ってみると) 探検中はほかの事に気を奪われて部屋の装飾、襖、障子の具合などには目も留らなかったが、我が住まいの下等なるを感じると同時に、かのいわゆる月並みが恋しくなる。教師よりもやはり実業家が偉いように思われる。例のしつぽに伺いを立ててみたら、その通りその通りとしつぽの先からご宣託があった」¹⁰という。

⁹ Ibid.,第1巻第1章 p 15-16、

¹⁰ Ibid.,第1巻第1章 p 125

いつの間にか相手の言い分を受け入れてしまっているのが可笑しい。

教師の自分は知的には実業家の金田よりも上である、しかし経済的には車屋と同じレベルである。普段の苦沙弥は、教養があれば他人よりも偉いと素直に信じ切って暮らしている。その結果、経済力がなくて実業家よりも小さい家にしか住めないのに、教養が何の役に立つのか？と疑問をもっているのが可笑しい。ここでは猫は先生の気持ちの代弁者だから、実は苦沙弥先生もまたその疑問をもっている。

さらに先の話だが、教え子に多々良三平がいる。大学卒業後実業界へ入ったばかりで、一面では常識的だが他面でバンカラ風を残した青年である。サラリーマンだから苦沙弥には嫌いな人種のはずだが、三平は天真爛漫な態度で振る舞うので苦沙弥にもその妻や子供たちにも好かれている。彼は苦沙弥に平然と「リーダー専門で十年一孤裘^{こきゅう}じゃ馬鹿げている」といい、苦沙弥にもそうだなと答えさせる大らかな人物である。三平に天気がいいからと散歩に誘われると牡蠣の人生を送る先生も散歩に出かけるほど気を許す相手である。その三平が、寒月について夫人に尋ねる。

「(寒月は) どげな人物ですか」「大変学問が出来る方だそうです」

「好男子ですか」「ホホホ多々良さんぐらいなものでしょう」

「そうですか、私くらいなものですか」「・・・」

「君よりよほど偉い男だ」と苦沙弥が答えると、「そうでございますか、私より偉いですか」と笑っても怒りもせずに聞いている。

寒月が今も論文を書いていると言うと、「やっぱり馬鹿ですな。博士論文を書くなんで、もう少し話せる人物かと思ったのに・・・そんな男にやるより僕にくれる方がよっぽどましだと言ってやった」。¹¹

三平はこの予告通り、最後にビールを持参して詫びを入れたうえで「太平の逸民」たちに寒月が博士にならないので富子と婚約したと披露する。「太平の逸民」たちを結婚式に招待したいと提案し、苦沙弥と独仙は断り、迷亭、寒月、東風は出席すると答える。この光景は「太平の逸民」たちがいよいよ現実の社会へ戻るかどうかの審判を受けているように見える。彼ら「太平の逸民」たちは、実業界にいる人物を嫌うのではなく、実業界へ入って拝金主義に陥って偉ぶり、知性を尊重しなくなる人々を俗物と呼んで嫌っているのだ。

苦沙弥は「くしゃみ」と読ませているが、「沙弥^{しゃみ}」は仏教用語で修行についたばかりの僧を指す。苦沙弥というのは、この「沙弥」に「苦しい」をかぶせたシャレた命名なのだが、苦沙弥が漱石の分身であることは勿論である。漱石自身も学校の教師で、胃弱でアバタ面、親父が昔は場末の名主だったことも符合している。ただ、分身だとはいえ、苦沙弥が決し

¹¹ Ibid., 第1巻第5章 p p 202-203

て漱石のミニチュアでなく、漱石の一面にそういう性格があったという意味である。

(2)「太平の逸民」から拝金主義者まで多彩な人物が登場

「猫」はオムニバス小説だから、容易に舞台を変えて多彩な人物を登場させる。その主な登場人物に関する猫によるプロフィールを紹介する。

① 迷亭。

苦沙弥の同級生で美学者。近眼で金縁眼鏡、金唐皮の煙草入れを愛用する粹人の道楽者でもある。ホラ話で人をカツイで楽しむのが趣味。迷亭の好物はソバで、つゆをちょっとつけて喉に流し込む食べ方が通の食べ方だと言う。苦沙弥がうどんの方がいいと言うと、うどんは馬子が食べるもので、ソバの味がわからないような人はかわいそうだとバカにする。彼の冗談や趣味は江戸っ子風である。そういえば、彼の叔父に牧山鉄扇¹²がいる。静岡に住む漢学者で、赤十字協会総会で上京し、苦沙弥宅を訪問する。丁髷を結い鉄扇を放さない。この人は元旗本で、明治維新で静岡へ移封された徳川宗家に付き添って移住した人である。迷亭の母も静岡と言うから、迷亭も旧幕臣の出身で、自身も静岡で生まれたか或いは江戸で生まれて小さな時に静岡へ移った人ではなかったかと思われる。

この迷亭が、最終章で「文明の未来記」を述べる¹³。個人主義がさらに発展して、まず、家制度が崩壊して親子別居が普通になる。さらに進むと、夫婦さえもプライバシーを主張しあって別居するようになる。芸術における個性尊重も同様で、遂には自分の表現は自分しか理解できず、誰もが自分自身の作品しか理解できなくなるだろう。詳細は後ほど検討するが、この時代は明治維新で世の中が一変し、人々が明るい未来に期待をもった時代だった。後れて文明開化した後進国日本が、日清、日露戦争で連勝し一流国になったと思って多くの人が喜んだ時代だった。戦争に勝利して国中が高揚感に覆われた時代だったが、漱石は文明社会の未来に閉そく感を抱いていたのである。

迷亭のモデルについて、後に鏡子夫人は、おおかた漱石自身がもっていた性格をむつつり屋の変人苦沙弥と軽口屋の江戸っ子迷亭の二つに分けて書いたものだろう、実際にも漱石には二面性があって、慎重で用心深い面と冗談や軽口をいい出したら際限なく喋る面があった、と言っている¹⁴。とすれば、漱石の分身は猫と苦沙弥に加えて迷亭もそうだったと言わねばならない。しかもその場合、迷亭のセンスとおしゃれ、そして時代を見る目も漱石の分身として評価する必要があると思われる。

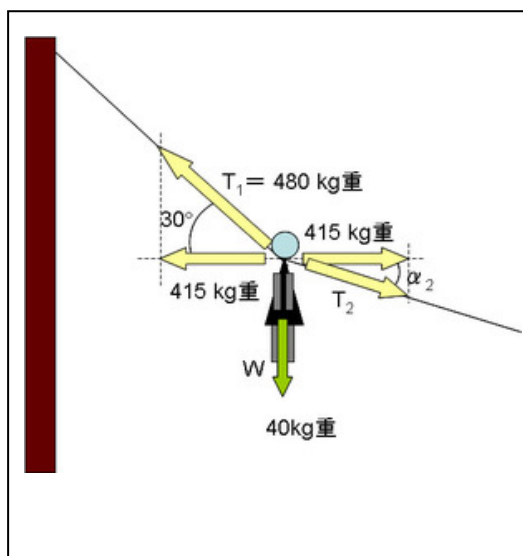
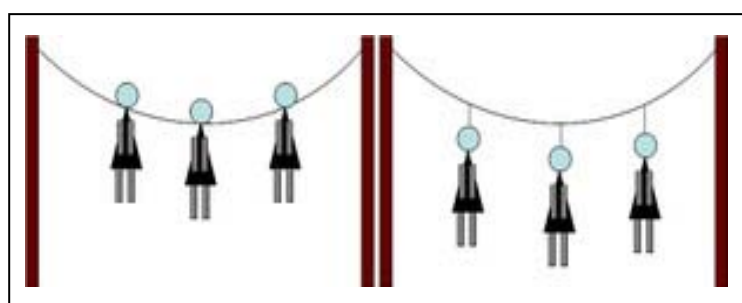
¹² *Ibid.*, 第1巻第9章、p p 357—366

¹³ *Ibid.*, 第1巻第11章、p p 5172—521

¹⁴ *Ibid.*, 「漱石の思い出」 p p 167—168

②水島寒月。

熊本出身で苦沙弥の元教え子で理学士。苦沙弥を先生と呼んで家へ出入りする。元々苦沙弥の生徒だったが、今では主人よりも立派になっているという。どういうわけかここへ遊びに来て、「来ると自分を思っている女がありそうな、なさそうな、世の中が面白そうな、つまらなそうな、すごいやつやっぽいような文句ばかり並べて帰る」と苦沙弥が言う。彼は、地球の磁気の研究をしており、その為にガラス玉を磨いてレンズを製作中。最近理学協会で「首くくりの力学」を研究発表した。¹⁵



首くくりの力学

$T_1 = 12W$ 。 $W = 40 \text{ kg}$ 、 $\alpha = 30^\circ$ とすると $\sin 30^\circ = 0.5$ なので、 $T_1 = 480 \text{ kg}$ になる。よって、一人の人を綱を引っ張る力は 480 kg になる。高く吊るには $\alpha = 30^\circ$ 以下が必要でもっと大きな力が必要で、同時に数人も引っ張ることは不可能。寒月の演説は上図の2方法が考えられるが左図は力学的に成立しないと述べたもの。寺田寅彦はこの原典はフィロゾフィカル・マガジン（1866年）にあったものを漱石に紹介したものであったと言う（一宮彪彦「夏目漱石と物理学から首くくりの力学」（2011・9・3から引用）

演奏会で金田の娘・富子に一目ぼれをされて、金田鼻子から人物調査を受ける。高校時代からバイオリンを弾く。熊本でバイオリン購入し、練習をしてきた苦労話も紹介される。寒月は夏目家へ出入りしていた寺田寅彦がモデルと言われている。考えてみれば漱石自身、学生時代には数学や科学が好きで、入学時には建築をやってみたいと考えていた位で、自然科学面に対する思いは相当強かったようだ。「猫」でも科学知識への関心はいくつか出てくるし、今後の「坊ちゃん」以降の作品にも何度が登場させて、作品を楽しくさせている。

¹⁵ Ibid., 第1巻第3章、pp. 956—100

② 越智東風。

「おちこち」と自称する寒月の友人で詩人。苦沙弥や迷亭が今後さらに個人主義が進むと人は愛や芸術を語れなくなると予言するのに対して、東風は人間の中で最も尊いものは愛と美で、愛は夫婦、美は詩歌や音楽の形で現実世界に現れる。愛の代表が夫婦だから未婚でいるのは天の意思に背くことになる」と主張する。

④ 八木独仙。

哲学者。彼は西洋文明の積極主義に反対して東洋哲学の特徴である精神修養で心の安心を得る消極主義が大事と主張する。

⑤ 金田。

近所に住む実業家の拝金主義者。苦沙弥に嫌われているので何とか仕返しをしようと考えている。彼は細君と違って鼻が低い、鼻だけでなく顔全体が平板で変化に乏しい。加えて背も低い。その為むやみに高い帽子や高い下駄をはく。彼がどんな仕事をしているかは定かではないが、幾つかの会社の重役をしている金持ちである。本人が拝金主義になった手の内を明かして、お金に対して「義理を欠く、人情を欠く、恥をかくの三角術」¹⁶を徹底して実践したおかげだと言う。迷亭は彼を評して泥棒の親分の熊坂長範の類と呼ぶ。

彼の細君が金田鼻子で、夫に引けを取らない拝金主義者。大きな鼻の持ち主で、猫が「鼻子」と呼んでバカにした。自分の娘の富子が寒月に一目ぼれをしたので、寒月の人物調査に苦沙弥を訪問する。鼻子は娘と寒月の結婚にはどこにもいるただの学士ではダメで博士でなければ認めないと言う。その条件付けと鼻子の横柄な態度に苦沙弥が怒り出す。

さらに鼻子は、苦沙弥家訪問の前に探偵を雇って寒月の人物調査をしている。隣の車屋のおかみさん、二弦琴の師匠、鈴木藤十郎などからも苦沙弥家へ出入りした際の言行に関するヒアリングをしたという。この訪問後、苦沙弥にバカにされたと感じて、ピン助、キシヤゴや落雲館中学の生徒たちを利用して大声で悪口を言い触らせるなどの仕返しをする。

⑥ 鈴木藤十郎、多々良三平。

鈴木藤十郎は、苦沙弥や迷亭の同級生。工学士で九州の炭鉱にいたが最近東京へ転勤してきた。鈴木は藤さんと呼ばれ、髪をきれいに分け、英国仕立てのツイードで派手な襟飾りや金時計をもつビジネスマンである。今では実業家の金田と同類である。金田家へ出入りし、金田の意向を受けて苦沙弥の動向を探る。多々良三平も九州唐津出身で、苦沙弥の教え子の法学士。六井物産に昨年入ったばかりで鈴木と同じ仲間。しかし天真爛漫なところ

¹⁶ Ibid.,第1巻第4章p154

があって、彼だけは珍しく苦沙弥とその家族からも好かれる人物である。

(3) 明治時代の庶民の日常生活

(庶民の日常の暮らしぶり)

苦沙弥家は本郷界隈にあるごく平凡な家庭の一つである。本郷といったが、小説で所在地を明示しているわけではない。ただ、隣接して車屋や二弦琴のお師匠さんの家の他に落雲館中学校があるという、当時漱石が住んでいた本郷千駄木を先ず彷彿とさせる。その普通の家庭で日々展開される朝夕の食事の風景、家族がそろって雑魚寝する寝室、お客を応接する座敷、苦沙弥先生が立てこもる書斎、猫と苦沙弥が昼寝する縁側、ネズミがうろうろ這いまわる台所、謡の稽古をする便所、庭の竹垣などが再現される。



（女は従属すべきと考える夫と夫を馬鹿にしてかかる妻）

普通の家庭では主役は夫人である。珍野家も同様だが、苦沙弥は何かにつけてすぐ癪癪を起こして威張る。これに対する夫人も黙ってハイハイと従う質ではない。例えば苦沙弥家のある朝の光景。

苦沙弥家の朝は、「あなた、もう 7 時ですよ」と声をかけて寝起きの悪い主人を起こすことと夫人の掃除で始まる。夫人の掃除の仕方は、はたきと箒をもってパタパタと書斎中をたたき散らす音をさせるだけで、ただ掃除のための掃除をしているようで運動か遊びかと思わせる。書斎の掃除を終えると苦沙弥の寝ている部屋へ来て、枕元で箒の柄をトントン突く。そこまで来て初めて苦沙弥は騒々しいと言いながら布団をはねのける。

「なんだ、騒々しい。起きると言えば起きる」

「起きると言ってもいつも起きてこないじゃありませんか」

「誰がいつそんな嘘をついたか」

「いつもですわ」

「バカ言え」

「どっちがバカだか分かりゃしない」¹⁷

夫人はブンといって箒をついた勇ましい姿で枕元に立っている。夫人の掃除は全く形式的、機械的にしているだけである。何のためにするか目的を見失った行為だから無駄のように見える。掃除の義務を果たすのは偉いが、その掃除の音が寝起きの悪い苦沙弥を起こす道具になっているようだ。このやり取りはどうみても夫人のほうに利があり、バカは天の邪鬼のような苦沙弥にあることは明瞭である。どうも夫人は初めから苦沙弥をバカにしてかかっているように見える。

ところで、夫人はドロボーに入られても、何を盗まれたかもよくわからないという鷹揚な性格である。夫人には苦沙弥とその仲間が話す英語や難しい話はほとんど通じない。そのくせ、苦沙弥が時々言う悪口には敏感に反応する。

- ・ 今月は月末の支払いが不足すると訴える夫人に、苦沙弥は足りないはずはない、医者も本屋も支払ったからといってすまして無視する。夫人が先生が食事でパンを食べたりジャムをなめるからだと反論すると、そんなに食べたはずがないと言いながら白髪の鼻毛を抜いて見せて、夫人を追っ払う。¹⁸

¹⁷ Ibid., 第 1 巻第 10 章、p p 386—393

¹⁸ Ibid., 第 1 巻第 3 章、p p 86—87

・夫人の頭にハゲを発見する。夫人が鬘を結うので髪がつれて誰でもハゲると反論すると、伝染するかもしれないから医者に診てもらえという。再び夫人が、あなただって鼻に白髪が生えている、ハゲが伝染するなら白髪も伝染すると応戦する。嫁に来る時なぜハゲを隠していたのかとも言う。¹⁹

・苦沙弥は自分は死なないから保険に入らないと強情を張る。そこへ姪の雪江が来て、偏屈な人に何かさせようと思ったら反対のことをいえばよいと教えられる。実際にも、雪江が保険に入らずその掛け金で別のものを買う方がいいと誘うと、急転直下、苦沙弥は保険は大事だから来月から入るという。²⁰

苦沙弥はもともと夫人をバカな女と見ていて、妻は夫に従属すべきものと考えている。妻を得て女はいいと思っているととんだ間違いになる、と言って、トーマス・ナッシュの「愚行の解剖」（1589年）からひいた西洋の格言を紹介する。²¹

- （アリストテレス）女はどうせ碌でなしだから大きいより小さい方が災いが少ない、
（ディオゲネス）妻をめとるのは青年では早く老年では遅い、
（ピタゴラス）天下の三恐は火と水と女、
（ソクラテス）婦女子を御するのが一番難しい、
（デモステネス）敵を苦しめには女を与えて家庭の風波を与えれば困憊する、
（セネカ）婦女と無学が世界の二大厄災、
（マルクス・アウレリウス）制御し難いのは舟と女、
（ブラウタス）女がオシャレをして着飾るのは生まれつきの醜を隠すため、
（バレリアス）女子となんぞ、友愛の敵に非ずや、避くべからざる苦しみには非ずや・・・。

妻の悪口を言っている最中に夫人が帰宅する。話を聞かれて苦沙弥はウフフ、構うものかと強がりと言う。夫人も遠くから存じません、と他人事のような返事でこれを無視する。

（駄の行き届かない三人の娘を見て、俗物の乱暴狼藉も教育では直せない思う）

三人の子どもたちの様子がまた面白い。

長女のとん子は南蛮鉄でできた刀のつばのような輪郭。おませだが、「お茶ノ水」を「お茶の味噌」、「元禄」を「双六」、「火の粉」を「茸（きのこ）」、「大黒」を「台所（だいどこ）」、「裏店」を「藁店（わらたな）」などと可愛いことをいう。次女のすん子は琉球塗りの朱盆のような顔で、いつも姉のとん子と一緒にいる。これに対して三女のめん子は三歳。女の子だが、自称「坊ば」。「ばぶ」が口癖。顔を洗うと言ってバケツから濡れ雑巾を出しては顔をなでまわす。地震が来るたびに、おもしろいわと言うような子だから、その程度で驚くには当たらない。それを見て長女のとんこが「坊やちゃん、それは雑巾よ」と言ってと

¹⁹ *Ibid.*, 第1巻第4章、p p 148—149

²⁰ *Ibid.*, 第1巻第10章、p p 424—425

²¹ *Ibid.*, 第1巻第11章、p p 523—526

りにかかるが、「いやーよ、ばぶ」と言いながら引っ張り返す。雑巾は姉と坊やちゃんの手で左右に引っ張られるので水を含んだ真ん中からぼたぼたしずくが垂れて坊やの足や膝を濡らす。²²

17,8 歳の女学生の姪の雪江が時々珍野家へやってきて苦沙弥とケンカする。ケチな苦沙弥に傘を買わせるなど調子がいい面もある。寒月に淡い恋心を抱いている。その雪江が、八木独仙から聞いたと言って珍野家の子供たちに石地蔵の話をする。ある辻の真ん中に石地蔵がいてみんなでこれに移転させようとする。力持ちが来ても、牡丹餅で誘っても動かない。偽札のお金やほら話で誘っても動かない。大金持ちが来ても、殿下が来ても、ゴロツキが来ても動かない。最後に馬鹿竹と呼ばれる大ばか者が来て、みんなが動いてほしいというのだから動いてあげなさいというと、石地蔵は大いに感じ入って早くいってくればよかったのと言って自分から動く。この話の中に出てくる大金持ちが「岩崎男爵のような顔」に例えられる。子供たちから岩崎ってどんな顔と聞かれて雪江は言葉を失って「ただ大きな顔」と答える²³。金持ちが「大きな顔」をする話は当然のことながら父の苦沙弥の影響である。苦沙弥が普段から金持ちは横柄な態度で偉ぶって「大きな顔」をしている連中であること、その代表例が三菱会社社長の岩崎弥之助と言っていたのである。



珍野家の子供たちの朝食風景（浅井忠挿絵）

左から長女とんこ、中央が三女の「坊ば」ことめんこ、左が次女すん子。めんこは女の子だがどういわけか自分のことを「坊ば」と呼ぶ。坊ばは食事では自分用の小型の箸や茶わんがあるが必ず姉の茶わんや箸を奪う。坊ばは姉から奪い取った大きな茶わんと箸でご飯を食べる。しかし箸が大きすぎてご飯がこぼれる、顔に付く。姉が見かねてほっぺに付いたお米を一つ一つとって食べてしまう。次女のすん子がお代りでご飯をおはちからよそって、ご飯が茶碗に入りきらずに畳の上へこぼれおちる。落ちたご飯をすん子は手掴みで食べる。また、すん子がみそ汁の中のさつまいもを食べようとして熱くて下に落とすと、それを見ていた坊ばが手づかみで芋をとって食べてしまう（第二章）。

²² Ibid., 第1巻第10章、p 390—391

²³ Ibid., 第1巻第10章、p 413

この子供たちの朝の食事風景の描写を読むと、改めて漱石の文章の上手さに驚く。と同時に、日頃から漱石が子供たちをいかに愛情あふれる優しい目で見えていたかを教えられる。小説の中では言っていないが、浅井忠画伯の挿絵でははっきりと和室におかれたちゃぶ台で行儀の悪い娘たちが朝食している絵になっている²⁴。明治以前の食事は各自が銘々膳を使っていた。そのお膳の位置が座る人の家庭内での地位を示すものだった。ちゃぶ台が日本の家庭に登場したのは明治 30 年ころだろうといわれている。漱石自身もその普及に一役買った人だったらしい。それは別にしても、ちゃぶ台は古い家庭内身分を壊して平等思想によって新しい家庭を作る家具だった。愛情で結ばれた家族がちゃぶ台について歓談しながら食事する光景は、近代日本で始まった平等な家族による一家団欒を象徴している。

夫人と三人の子どもたちの様子もあわせてみると、苦沙弥家の場合、主人をバカにしてかかる妻としつけの行き届かない娘たちの図ができそうだ。しかし、社会に対すると同様に、これまで妻と子育てに関しても放任主義をとってきた苦沙弥は、妻と子どもたちの天真爛漫ぶりは無能無才なごろつきが横行する社会と同じではないかと連想している。妻や子どもたちの乱暴狼藉ぶりは幼少時代から目を出すので、先天的な要因が多くて教育や薫陶では治せない、同じように社会の秩序の崩れも教育や薫陶では治せないと考えているようだ。

猫の目であるが、インテリの属する中流階層が住んでいた本郷千駄木の家庭の描写をみると、当時の中流階層の人々が何を食べて、何を着て、どんなことを考えて暮らしていたか、今日の我々にも具体的に理解できる。漱石が「猫」を書いた当時で、岡山や静岡の田舎に住んでいた人たちは、東京の中流階層の生活ぶりを再現した描写に新鮮な発見をしたに違いない。中流階層ではあるが、庶民の日常生活をかくも淡々と、面白おかしく描いた小説は「猫」以前にこの国では見ることがなかった。江戸時代の変化に乏しかった時代が終わって、明治後期には社会の急速な階層分化が進み、旧社会のまま取り残された人、文明開化の恩恵にあずかった人、一獲千金のチャンスに恵まれた人やそうでなかった人々など社会層が急速に多様化していた。そのような状況の下で新しい中流階層の日常生活が生き生きと描写されて、当時の人々に驚きをもって迎えられたのだろう。

²⁴ 「復刻版吾輩ハ猫デアル」（ほるぶ社、S 60 年 10 月） 下巻、P 30

4 大学の先生が書いたユーモラス小説

(1) 明治は猛烈な立身出世主義の時代だった

福沢諭吉は明治初期に、青年がみんな政府関係の仕事に殺到し民間事業に人材が集まらない状況に危機感をいだいて、文明社会は政府ではなくて民間事業に従事する人民の活動により発展するのが基本で、政府の役割は自ら事業を行うよりも民間事業を保護育成する方が先決だと指摘した。明治維新から間もないのに、すでに学校、軍隊が改革されて、鉄道や電信も敷設された。石やレンガ造のビルも作られ、鉄橋も次々と整備されてきた。その決断の速さ、資金力などを見れば政府の優秀さがよくわかる。そうであっても、事業は本来民間人が協力して組織を作って行うべきもので、それによって始めて人民に幸福をもたらすと述べている²⁵。この福沢の指摘は、明治期には民間活力が弱体ななかで、豊富な人材をそろえ豊かな資金力で改革を進める国の突出ぶりをうかがわせる。

明治維新は、徳川時代の固定化した身分制度を廃止して、人々に自由な移動、自由な職業選択を可能にし、門地を問わず能力があれば政府高官にもなれる時代に変えた。M14 年の西南戦争を機に、維新以来くすぶり続けていた不平士族の反乱も沈静化して社会の安定化が進んだ。この頃から強大な政治権力と民間の事業活動の弱小ぶりが顕在化し、能力ある人々の多くが政府官僚へ進むようになった。政府は官僚制のもとで次第に巨額な予算と事業執行権を確保して、強大な権力を行使するようになった。

M19 年の大学令は、学問を身を立てる財産と考えることにより学問による人材育成＝立身出世に結びつけた制度である。当時の文部大臣は森有礼で、M22 年、学校の種類で人材育成の目的が異なり、高等中学校は官僚、学者、経営者の育成、尋常中学校は中流階層の育成を目的にしていると演説した。このため多くの中流家庭では子弟を高等学校へ入学させようと奔走した。高等学校を卒業すれば自動的に帝国大学に入学し、帝大を卒業すれば無試験で官僚になれるからだ。学制は初めから立身出世を目指す人々の能力を評価する装置として造られた。明治の大学は、東京帝大に「能力」ある学生を集中させて教育する役割を与えて、その学校を卒業すれば自動的に高級官僚として採用し、さらにその学校閥が政府の官僚制を独占的に支配し機能させていくシステムの頂点だった。この学校と官僚制がセットになったシステムが立身出世主義を拡大再生産するマシンになった。

²⁵ 福沢諭吉「学問のすすめ」（岩波文庫、2010 年 5 月）第 5 編 p 54-61

立身出世主義が形成される上で、よく福沢諭吉の「学問のすすめ」が指導的なイデオロギーだったといわれる。しかし福沢は今日でもよくいわれる、いい大学に入りいい会社へ入るために勉強しろということは一度も言ってはいない。彼は西洋の実学をしっかり学んで、天下の人心を高いレベルへ導くことが学問の目的と言っている。「大いに学問に励み、農民なら大農民になれ、商人なら大商人になれ、小さな生活に満足せず、貧乏であっても文明のことを学べ」と言うのである²⁶。だから、福沢は官僚になるための勉強をしろといっているのではなく、政治、経済、文化、科学などの各分野における真の指導者になるためにしっかり西洋文明を勉強せよといっているのだ。

明治の立身出世主義は今日の受験勉強の原型で、大学へ入るための激しい入試競争が日本資本主義を発展させる原動力になった。立身出世主義は官僚制に守られて強い影響力を発揮し、日本人全体に勤勉で禁欲的な生活を促す倫理になっていった。あたかも西欧で資本主義を推進した精神が、昔からのひたすら利益や欲望を求める精神によるのではなく、衝動や欲求の自己統制と生活の徹底した合理化が神から課せられた使命と考えるプロテスタンティズムの世俗内禁欲の精神的態度（エートス）だったことに似ている²⁷。八百万の神を信仰する日本人の場合、資本主義の発展を人々の精神面で支えたものは特定の宗旨でなくて「立身出世主義」だったということができる。

(2) 漱石は持っていた立身出世カードを全部捨てて小説家になった人

漱石は立身出世主義が広く蔓延した明治時代のエリートで、立身出世のためのカードを全部持っていた人だった。

まず第一に学歴。

漱石は東京牛込馬場下の名主夏目小兵衛直克の 5 男 3 女の末っ子で、慶応 3 年 1 月 9 日に生まれた。多くの人々と同様に、明治以降夏目家の家運は急速に傾いた。長男大助は一家の期待を担って東大の前身の開成学校で学んでいたが肺を病んで中退した。道楽ものだった次兄栄之助も身を崩し、3 番目の兄和二郎直矩も遊芸におぼれた。金之助（漱石の本名）もはじめは名主という旧幕時代の行政官に必須の教養だった漢学を学んだが、その後は兄たちとは一線を画す身の処し方をした。

明治の立身出世主義が始まろうとした時期で、没落しかけている名主の子が明治の新しい時代に自分の席を確保するためには大学予備門に入学することが絶対条件だった。そのた

²⁶ *Ibid.*, 「学問のすすめ」第 9 編—10 編

²⁷ M・ウエーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（岩波文庫、S48 年 3 月）下巻第 2 章 p p 224-225

めには英語を学ぶ必要があった。当初英語を教えない正則中学へ入学したが、大学予備門へ行けないことがわかり、退学した。次に二松学舎へ入学する。二松学舎も漢学中心の授業だったため、M16年に金之助は英語学校成立学者へ転校する。17歳だった。その翌年には大学予備門入学が決まった。その金之助が英文学研究を決意するのはM21年第一高等学校へ入学した時だった。M23年に帝大文科大学英文科へ入学すると、成績優秀だったようで、すぐに文部省貸費生になった。学生時代の漱石は優秀で、翌年には特待生となって授業料免除を受けるほどだった。

第二に抜群な英語力。

学生時代に、お雇い外国人教師デイクソン先生のために鴨長明「方丈記」を英訳したところその英文がとても見事だったと評価された。また、同じく英語教師だったマードック先生も金之助を同級生の中でも優秀な学生と評価した。

ロンドン留学でノイローゼにかかった原因に金之助の英語力の弱さがあったという人がいる。英語の読み書きは十分だが会話力に難があるというのが日本人共通のハンディキャップだが、金之助の場合日常会話に不都合さがない程度の会話力をもっていた。彼がロンドンで悩んだことは、英語世界の文学と漢学世界の文学が全く別物で、西洋文化の素養が少ない日本人にとっては一定レベル以上の英語文学の理解は不可能だという点だった。しかしこのことは英語力の不足を意味するのではなく、英語圏の人々の感性が漢字文化圏の日本人のそれとは根本的に異なるという認識をもったということだ。金之助は、大学卒業頃から、日本人の美意識や感性をもつ自分には異質な文化圏の英文学の正しい理解できないのではないかというアポリア（難問）を抱いていた。このアポリアを初めて自覚し英文学に不安の気持ちを抱いたのは松山へ行った時だった。その頃彼は最初の激しい神経衰弱に襲われていた²⁸。

本当は英文学研をは好きでなかった。元々南画の掛け軸の前に座り込んで終日その絵を眺めているような暮らしを好んでいたのに、英文学研究者になってしまった。英国留学も自分から望んだわけではなかった。その不安と神経衰弱を抱えたまま英国に旅立った。留学中にだんだん文学がいやになってくるほどだった²⁹。しかし、彼の高い英語力は、日本全体が西洋文明の知識をお雇い外国人教師や西洋の文献から得ていた明治期には、日本の知識人の資格証明のようなもので、彼は英文学に関してその頂点にいたのである。

第三に留学経験

大学を卒業すると、当初は高等師範の講師をしながら大学院で勉強したが、突然松山中学

²⁸ *Ibid.*, 第14巻「文学論（序）」

²⁹ 「夏目漱石・処女作追懐談」（角川文庫「吾輩は猫である」H24年5月、所収）

の英語教師になり、次いで熊本の第五高等学校教授になった。五高在職中に貴族院書記官長中根重一の長女と鏡子と結婚した。

その後まもなく文部省第一期留学生として 2 年間、英語研究のためロンドン留学をした。留学後は、一高教授で帝大講師を兼任した。帝大ではお雇い外国人教師だったラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の後任の講座担当に予定されていた。

お雇い外国人というのは開国したばかりの日本が先進国の学術、技術、文化を摂取するために招いた欧米人を指す。彼らは高給で住居も提供されるなど破格な待遇を受けた。しかし政府の財政負担は厳しかったので、もともとやむを得ない一時的な措置と考えられていた。日本人を留学させて一人前の技術者、学者に育成して活躍させるのが基本だったが、留学に要する時間や高い費用、一度に大勢育成できない非効率性に比べて、お雇い外国人の場合は一時的には多少高額支出があっても一旦、招へいすれば大勢の人々を短期間に学習させられた。だから、まずお雇い外国人で急場をしのいで、次に派遣した留学生が帰国したら順次交代させていくという大方針のもとで、西欧の文明摂取がスタートしていた。

この当時の日本は貧しくて外国への渡航費や滞在費を負担できる人は限られていて、国が派遣する官費留学か一部の大金持ち位しか留学できなかった。だから金之助がした外国留学はエリートの証明で、特に金之助は帝大の英文学教授として文部省が将来を約束した上で、初めて官費負担で派遣された超エリートだった。

第四に帝大の先生

当時大学は本郷に一つしかなかった。高校も全国に八校でそれぞれ帝大の予科のようなものだった。後に漱石が書いた「三四郎」で、三四郎が熊本の五高という予科を卒業して大学に入るために上京してくる話を書かれるが、その予科や大学予備門が学制により高等学校に代わったものである。当時の帝大は、国内唯一の大学と言うこともあって、先に見た官僚育成の役割と同時に、日本の文明化の窓口のような役割を果たしていた。民間を含めて、西洋に開かれたパイプをもつ人も組織もない時代である。西洋の知識はお雇い外国人や書物を解して日本へ流入した。西洋に関する人も情報も初めはまず帝大に届けられて、帝大から日本全国へ分布して行った。今日でもそうだが、情報を独占しそれを分配できる人や組織は最も強大な権限を手にする。そのため、帝大の先生となればこれ以上の知識人がいないと思われるほど「偉い先生」だった。また実際にも、帰国後の漱石は、日本における英文学研究のトップランナーになっていた。

立身出世カードを捨てる漱石

鏡子夫人によれば、留学から帰国した漱石の給料は、一高 700 円＋大学 800 円だったという。当時の警察官の月給が 30 円位というから、給料もまた破格の高額だった。留学から帰

国したM36年の段階で、漱石は、高給だっただけでなく、留学によって将来を約束された大学の先生という偉い人になって、立身出世に必要なカードを全部持っていた人だった。しかし、その外見とは別に、漱石の心と神経は壊れかけていた。すでにみたように、ロンドンで神経衰弱をこじらせた漱石は、留学から帰国して4年後に突然これまでの英文学研究を捨てて小説家へ転職する。その理由は、漱石によれば、日本人である自分の感性では正しい英文学理解は不能だと実感し、英文学に対して絶縁状を出したためだった。司馬遼太郎は、漱石が大学を辞めて小説を書くようになったことを次のように言っている。

当時大学の先生を辞めると言ったらどういへばいいでしょうか。総理大臣を辞めて田舎の役所の戸籍係になるぐらいなものかもしれません。漱石という人は、明治時代という立身出世の時代に。立身出世のカードを全部持っていた人で、それを全部捨てた人であります。³⁰（「司馬遼太郎全講演4、「漱石の悲しみ」401p）。

M40年2月、大阪朝日新聞社から招へい話が持ち上がった。その直前に読売新聞社からも同様な話があったが条件が折り合わず立ち消えになっていたところだった。翌3月に東京朝日の池辺三山の来訪を受けて正式に入社を決意する。同じ頃、帝大からも英文学担当の教授に推す内示があったが、それも断って教職から身を引くことにした。4月の朝日新聞社の入社の辞で、周囲の人々が自分に大学を辞めて新聞社へ入ったことを大英断で驚いたと言ってくる、しかし自分は新聞が商売なら、大学も商売、違うのは民間企業が営業するかお上が営業しているかの違いだけで大したことではないと述べている³¹。

また朝日新聞社へ移ってからの話だが、M44年2月、文部省から博士号授与の通知があった。漱石はこれを辞退した。その後、文部省が授与はすでに決定済みで発令されているので受け取ってほしいと再三言ってきたが、自分はその荣誉にふさわしくないで受け取れないと述べて辞退し続けた。これが「博士問題」である。その経緯は「博士問題の成行」³²述べられている。博士制度は学問奨励のために政府からみれば有効かもしれない。しかし国中の学者が博士になろうとして勉強する気風を生まれると弊害も生じる。博士でなければ学者でないという気風を生むのもよくない。明文化しているわけではないが、大した英文学研究の実績もない自分を博士にすると弊害の方が多そうだと、自分は博士制度の破壊を主張するわけではないが、これ以上弊害が広がるのが心配だから辞退する、と「成行」で述懐している。

博士号授与が新聞で伝えられると多くの知人がこれを祝した。次に博士号辞退が報道されると、各方面から賛否両論がわきあがった。愛媛の友人・森園月などは博士号授与で賀状

³⁰ 「漱石の悲しみ」pp.401-402（朝日文庫「司馬遼太郎全講演（4）2005年1月所収）

³¹ 「入社の辞」（青空文庫、2003年5月修正版）

³² 「博士問題の成行」（岩波文庫「漱石文明論集」2001年12月、所収）

を書こうとしたら、辞退の知らせを聞いて、もらっても辞してもどちらも賀すべきことだという祝辞を送ってきた。漱石にとってはどちらの意見も想定内だったが、高校時代の恩師・マードック先生からの手紙には驚かされた³³。手紙には博士号辞退を喜び、漱石がモラル・バックボーンをもってうれしいと書かれていた。先生が言うには、研究者が人並み以上に傑出しようと努力するのは当然だ、そして、研究者の人物いかんとその仕事の実績の社会に対する貢献度に応じて評価されるべきだといって、漱石がきっぱりと受賞を断わり、漱石が権威や権力になびかなかったことを彼は「しっかりしたバックボーンをもつ人」と正当に評価したのだった。

博士号辞退は、激情にかられた漱石のパフォーマンスではなかった。研究者としての実績をきちんと出さなければ教壇に居続けるわけにいかないし、成果を出さないまま博士にはなれないというのが漱石のモラルだった。大学教授を辞した上に博士号授与を辞退していれば自ら「退路」を断ちながら。文学一本でいく決意を固めていく。それほどまでにロンドンで味わった挫折や英文学への絶縁、それに対する総括が自身に対して厳しいもので、その体験がその後の作家生活においても彼の高いモラルとして貫通しているのを見ることが出来る。



千駄木の漱石住居跡

ロンドンから帰国後、約3年半ここに住んだ。ここで神経衰弱が悪化し、「吾輩は猫である」を書いた。住宅街の一角だが、この裏に今も郁文館高校があり、ベースボールで遊ぶ子供たちの声が聞こえそうだ。

³³ Ibid., 「博士問題とマードック先生と余」(岩波文庫「漱石文明論集」2001年12月、所収)

5 精神的向上心あふれる「太平の逸民」たちの異議申し立て

「猫」を読む楽しみの一つは苦沙弥のサロンへ集まる迷亭、寒月、東風、独仙らの果てしない議論である。猫は彼らを「太平の逸民」と呼ぶ。明治の頃には「高等遊民」と呼ばれた一群の人々がいて、これといった仕事をするのでもなく自由時間を多く持ち、日常生活の中に目的を見いだせず無為と倦怠の怠惰な日々を過ごしていた。しかし、苦沙弥サロンの高等遊民たちは、初めは西洋かぶれがひどくなる一方の知識人批判をし、次いでお金の物を言わせて大きな顔をする実業家たちを俗物といって軽蔑する。そして最後には個人主義という近代人の病理問題も議論しあう精神的向上心あふれる人たちだった。「太平の逸民」というと怠惰な人々を連想し勝ちだが、苦沙弥サロンに集う人たちはそれとは違って、互いに啓発しあい切磋琢磨しあって日々成長しようとしている人々である。彼らは明治維新以降の怒濤のような西洋文明の流入の中で、流されようとしている古い文化に代わる新しい日本文化の建設を模索する人々だった。

漱石の「猫」以降、その人気にあやかって猫の後日談や猫拔きの「吾輩モノ」がたくさん生まれた。有名なものは内田百閒「贋作吾輩は猫である」³⁴（S24年）だろう。「贋作」は救われた猫が別の家へ貰われて新しい暮らしをするという趣向だが、残念ながら面白くない。その理由は、作家が不勉強で漱石の「猫」の繰り返しが多く、その上に登場人物たちに精神的向上心が乏しいためである。

この章では苦沙弥サロンの「太平の逸民」たちの会話から文明批判の底を流れている時代認識を抽出する。そして彼らの時代認識の先に見えてくる明治の近代化に対する異議申し立てを探ることにする。

(1) 西洋かぶれを徹底的に批判

迷亭は、金縁眼鏡をつけ、金唐皮の煙草入れを愛用する粹人の美学者である。ホラ話で人を担ぐのが趣味のような人である。その迷亭が、ある日急に水彩画を描き始めた苦沙弥先生がどうもうまく書けないとこぼすのを聞いて次のように言う。³⁵

そう初めから上手に書けるわけがないさ。第一室内の想像ばかりで絵が描けるわけのものではない。

³⁴ 内田百閒「贋作吾輩は猫である」（ちくま文庫、2003年5月）

³⁵ *Ibid.*, 第1巻第1章 p 11—21

昔イタリアの大家アンドレア・デル・サルトが言ったことがある。絵をかくなら何でも自然そのものを写せ・・・自然はこれ一幅の大活画なりと。どうだ君も絵らしい絵を描こうと思うならちと写生をしたら。

（迷亭の）忠告に従って写生に努めているが、なるほど写生をすると今まで気がつかなかった物の形や色の精細な変化などがよくわかるようだ。・・・さすがアンドレア・デル・サルトだ。

すると迷亭は笑いながら、実は君、あれはでたらめだ・・・君がしきりに感服しているアンドレア・デル・サルトさ、あれは僕のちょっと捏造した話だ。君がそんなにまじめに信じようとは思わなかった、ハハハハ、と答える。

迷亭が苦沙弥と我々読者もからかっているのだが、話に筋が通っているだけに苦沙弥先生だけでなく我々読者もすっかり巻き込まれてしまう。その捏造がどこかと言われてもよくわからない。というのは、アンドレア・デル・サルトというイタリアの画家は16世紀に実在した人だから、話がややこしい。ウィキペディアによれば、16世紀初頭に活躍したフィレンツェの画家。ピエロ・ディ・コジモの下で修業し、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロなどの影響を受けながら画風を形成し、イタリアルネッサンスを代表する画家として名声を博した。1518～1519年に仏王フランソワ一世にダ・ヴィンチらとともにフォンテンブローへ招へいされて絵画を教えた。この招へいは、フランソワ一世がすでに経済や軍事面ではイタリアを追い越したフランスが文化面でも追いつこうとしたもので、これを機にフランスではフォンテーヌブロー派が文化的隆盛を見せ、美術界全体でもマニエリスム運動が始まった。いずれにせよ、アンドレア・デル・サルトはイタリアルネッサンスの美術を代表する一人で迷亭の言い写実云々の話の真偽は不明で、簡単にねつ造とも言えない話である。

迷亭は、こういう冗談を真に受ける人に対して大いに滑稽的美感（滑稽美）を挑発するのが面白いと公言する。その具体例だと言って、ニコラウス・ニッケルベリー（ディケンズの小説の主人公）が助言してギボンに仏国革命史を英文で出版させたという出まかせを言い、それを聞いた学生が真に受けて演説会で喋った。また、ハリソンの「セオファーノ」は歴史小説の白眉だというありもしない嘘をいうと、そうだと言って同調する物知り顔の先生がいたなどと例示する。苦沙弥先生の受け売りもその一例だが、迷亭の「滑稽美」の追求は日本の知識人の西洋崇拜を皮肉るものだった。³⁶

迷亭は、次に「トチメンボー事件」を起こす³⁷。越智東風が迷亭と一緒に西洋料理屋へ行った時の話である。迷亭は西洋通ぶってナメクジのスープやカエルのシチューが旨かったと

³⁶ *Ibid.*, 第1巻第1章、p p 20—21

³⁷ *Ibid.*, 第1巻第1章、p p 47—49

西洋通ぶった話をしたすぐ後で、ボーイに「トチメンボー」を注文する。負けず嫌いで知ったかぶりのボーイは、聞いたことがなかったのでメンチボー（メンチボール）かと聞き直す。違うと答えると、今度は少し時間がかかると答える。次に幾らでも待つから頼むと言うと、材料が払底して今日はできないと答える。結局迷亭らはボーイをからかって楽しかったと言いながら何も食わずに帰る。「トチメンボー」はメンチボーを洒落て名付けたもので、当時正岡子規門下の俳人に橡面坊という俳号をもった人がいたので、その名前をメンチボーにかけてからかったものらしい。この話には後日談があって、トチメンボーというのは橡の実を混ぜたうどん（栃麺という）をつくる時に使うのし棒を指すという説、うろたえる＝とちめくの擬人化したものという説まで登場するなど話題となった言葉だった。いずれにせよ、このトチメンボー事件もまた西洋崇拝を皮肉った話である。

迷亭だけではない、猫もまた、西洋崇拝に批判的である。銭湯をのぞきに行った猫が、そんなに裸体がいいなら娘を裸にして、ついでに自分も裸になって上野公園を散歩するがいい。出来ない？出来ないのではなく西洋人がやらないから出来んのだろう。不合理な礼服を着て帝国ホテルへ出かけるが、ただ西洋人が着るから着るのだろう。西洋人は強いから無理でもばかげていてもまねるのだろう、と猫までが言う³⁸。

迷亭や猫だけでなく西洋かぶれに対する批判は「猫」の随所に登場する。もう少し後に時期になるが、先にあげたマードック先生が外国人でありながら、我らが忘れかけている日本歴史研究をこつこつと続けている様子を紹介して、漱石は次のような警句を述べる。

我々は渾身の氣力を挙げて、我々が過去を破壊しつつ、倒れるまで前進するのである。しかも我々が倒れる時、我々の煙突が西洋の如く盛んな煙を吐き、我々の汽車が西洋の汽車の如く広い鉄軌を走り、我らの資本が公債となって西洋に流用させられ、我々の研究と発明と精神事業が畏敬をもって西洋に迎えられるや否やは、どううぬぼれても大いなる疑問である。³⁹

(2) お金に物を言わせて偉ぶる俗物批判

ある日、娘の縁談相手の寒月君の人物調査に来たという設定で、金田鼻子が登場する⁴⁰。鼻子はこれまで角の西洋館に住むとか実業家の金田の妻と名乗るだけで相手が驚き態度を変えて丁重に処遇されてきたので、どんな会へ出ても身分の高い人の前でも金田夫人で通してきた人である。それに対して、苦沙弥はそんな人は知らないという態度で迎える。もと

³⁸ *Ibid.*, 第1巻第7章、p p 271—274

³⁹ *Ibid.*, 「マードック先生の日本歴史」

⁴⁰ *Ibid.*, 第1巻第3章、p p 102—112

もと苦沙弥は実業家より中学校の先生の方が偉いと思い込んでいる人である。鼻子はむやみに伯爵、貴族院議員、豪商などを重宝がって自分よりお金がない人や身分が低い人を軽蔑する。だから中学校の貧乏教師などどうでもよく、金持ちで有力者の金田の権威にペコペコするのが当然だと思っている。このようにお互いの思い込みの対照ぶりが滑稽である。

鼻子は寒月が博士になれば娘を嫁にやると決めていて、博士であれば何でもよいという思いに取りつかれている。寒月が博士になる可能性を聞かれても苦沙弥は取り合わない。次いで、人柄を知りたいというので寒月から届いた 3 枚の絵ハガキを見せて、鼻子の人柄の俗人ぶりを暴露して笑う。

1 枚目は狸の園遊会の絵で、「来いさ（今宵）、お月夜で、お山婦美（山見分の役人）も来まいぞ。スッポコポンノポン」という歌が付いている。冬の闇夜に山の中で狸が舞踏会のようなことをやる、その時、足をふみならして歌うものらしい。伯母が囲炉裏の前で子供たちに幻想的に語ったという説明が付いている⁴¹。鼻子は歌詞を棒読みするだけでバカバカしいという見当違いな感想を述べる。

2 枚目は羽衣の天女の絵で、天文学者が星を眺めていると美しい天女が現れて音楽を奏でる。天文学者が聞き惚れているうちに凍死した。これは本当の話だとうそつき爺が言っているというオチがついている。実話ならうそつき爺はウソつきでないし、作り話ならうそつき爺として本当のことを言っていることになる。要は自然科学者が理性の枠を超えて宇宙の神秘を聞こうとしているのだが、鼻子は無意味といって一蹴する。

3 枚目は帆かけ船の絵で、「よべの止まりの十六小女郎、親がないとて荒磯の千鳥、さよの寝ざめの千鳥に泣いた、親は波乗り波の底」の歌が付いている。これには鼻子は感心する。この歌はいわゆる俗謡の端唄物で、三味線用の歌曲である。だから鼻子がこれに感心したのは自分の方から下賤な俗人的素性を示すことになった。

別の日、苦沙弥宅へ泥棒が入り、お金は盗られなかったが山芋と夫人の着物や帯を盗まれる。その翌日警察に被害届を出すための被害リストを作成中に、教え子だった多々良三平が訪れる。普段着を盗まれて震っている苦沙弥夫婦を見て三平が「愚な事」という。それは苦沙弥は大学卒業後 9 年もたつのに、安月給で財産もなく勉強の方も一向に評価されない。貧乏なので泥棒にあえばすぐ困って震っている状況を指している。三平は続けて言う。

それだから実業家に限ると言うんです。先生も法科でもやって会社か銀行へでも出なされば、今頃月に三、四百円の収入はありますのに。惜しいことでござんしたな。・・・先生あの鈴木藤十郎という工学士を知ってなさるか。・・・月給が 250 円で盆暮れに配当が付きますから、何ほでも平均四、五百円になりますばい。あげな男がよかしこ取っておるのに、先生はリーダー専門で十年一孤^{こきゅう}婆じゃ馬

⁴¹ 寺田寅彦「冬夜の田園詩」（寺田寅彦随筆集第 5 巻所収、岩波書店、1948 年）

鹿げておりますなあ。それを受けて、実際馬鹿げているなあと主人も言う。彼のような超然主義の人でも金銭の観念は普通の人間と異なるところはない。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかもしれない⁴²。(第5章、p p 198～199)

苦沙弥が知性を最優先して学者的孤高を誇る態度を愚かと言って、拝金主義を平然と主張する三平はユニークである。実業家の卵で鈴木藤十郎の後輩だから、本来ならば苦沙弥が最も嫌いな「俗物」のはずだが、何事にも天真爛漫な三平は妙に苦沙弥に気に入られる。訪問した直後にいい天気なのに家でくすぶっているのは不健康だから散歩すべきだ、と苦沙弥に忠告し彼をその気にさせてしまう。彼は子供たちにも好かれていて、約束の寿司を忘れたと言うと「いや一だ、でも次にはきつともってきてね」という可愛いやり取りが出来る。夫人に対しても、苦沙弥が言った「オタンチン・パレオロガス」が「ハゲ」を指す言葉でないことを明らかにして安心させる。また彼は、泥棒が入っても役に立たない猫は煮て食べたいと言う話は、猫自身をびっくりさせてさらに別の事件を引き起こすことになる。このように、三平は実業界に属するが偉ぶらず、誰に対しても分け隔てなしにずけずけとものを言う天真爛漫さがあって憎めない存在になっている。

着るものが盗まれて震っていた苦沙弥は多分、迷亭たちから借金をして当座を凌いだことだろう。苦沙弥が自分の敵とみなしているのはお金に物を言わせて偉ぶる実業家である。彼らは明治時代の拝金主義のせいで、お金持ちであれば上流階級だと思えるようになって偉ぶっている。知識を求めて努力したものが知識人で知的レベルでは明らかに自分の方が上なのに、お金のため「三角術（義理を欠く、人情を欠く、恥をかく）」を貫いたものがお金持ちになって偉ぶっている。知識人もお金を欲しがると知性を最も大事にしている。金持ちは今以上にお金を欲しがると、本気で知性を欲しがっていない。金力を嵩に着て偉ぶる実業家を俗物と呼んで苦沙弥先生は怒っているのである。

(3)「猫」の背後に日露戦争の影

漱石が「猫」を書いたのはM37年暮れからM39年夏までの約一年半だが、小説の中の時間はM37年暮れからM38年秋までの約十ヵ月間の出来事というのが定説になっている。

この小説の登場者は皆よくタバコを吸う。そのタバコを見て、ある研究者は小説が書かれた時代がわかると言う⁴³。タバコをたしなむ苦沙弥は、最初のうちは「日の出」(20本入り、5銭)を吸っていたが泥棒に入られた頃から銘柄を「朝日」に代えた。ここに「猫」に日露戦争の影響が出ていると言うのである。

⁴² *Ibid.*,第1巻第5章、p p 201-202

⁴³ 五井信「『太平の逸民』の日露戦争」(『漱石研究』第14号、翰林書房。2001年10月)

明治以降、刻みタバコを煙管で吸っていた喫煙習慣が紙巻きタバコへ変わった。タバコは当初民間企業が製造販売していたが、日露戦争の戦費財源の確保のためにM37年7月に政府は完全専売品にした。製品も「敷島」(8銭)、「大和」(7銭)、「朝日」(6銭)、「山桜」(5銭)の四種類に限った。そのために「日の出」を吸い終わった苦沙弥は「朝日」に代えざるを得なかったのだろうとみる。

苦沙弥は「日の出」や「朝日」を吸い、寒月は「敷島」を吸う。迷亭は金唐皮の煙草入れから最高級品の刻みタバコ「雲井」を銀煙管で吸って、あの「トチメンボー」のレストランでは葉巻を吸ってボーイを煙に巻いた。そして実業界に入ったばかりの三平も「煙草もですね、朝日や敷島をふかしては幅がきかんです」と言って、英国製の「エジプト煙草(エジプシアン)」をだして「これを吸っていると信用が違います」と見栄を張る。どうも漱石は煙草道具が男の身だしなみの大切な小道具と考えていて、ここに相当な美意識を感じている。

(ネズミ退治大作戦)

先だってじゅうから日本はロシアと大戦争をしているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本びいきである。できうべくんば混声猫旅団を組織してロシア兵をひっかいてやりたいと思う位だ。⁴⁴

猫がネズミ退治する第5章は、M38年7月1日発行の「ホトトギス」10月号に掲載された。この年の5月27日～28日に日露戦争のハイライトになった「日本海大海戦」が行われた。第5章で漱石は東郷元帥による大海戦を参考にして猫による「ネズミ退治大作戦」というパロディーを作った。猫がネズミ退治の心境になったのは、泥棒に入られた翌日多々良三平が飯を食うだけでネズミ一匹とったこともない猫など食べてしまえと苦沙弥に提案したためだ。

猫といえども社会的動物である。社会的動物である以上はいかに高く自ら標置すると、ある程度までは社会と調和して行かねばならん。・・・庸人と相互する以上は下って庸猫と化せざるべからず。庸猫たらんとすればネズミを捕らざるべからず。・・・吾輩はとうとうネズミを捕ることに決めた⁴⁵。

猫はまず戦場の地形を下見する。戦場といっても4畳くらいの台所である。流し、土間、へっつい(かまど)、猫の食器用の鮑貝、戸棚、すり鉢、大根卸し、すりこ木がある。次いで作戦計画を練る。ネズミがどの方向から来るかと四方を見回すと、流しルート、風呂場ルート、戸棚ルートの三方向がありそうだ。二方向からの攻撃ならなんとかなる、しかし

⁴⁴ Ibid.,第1巻第5章、p207

⁴⁵ Ibid.,第1巻第5章、p206

三方向から来たら手が打てそうにない、などと東郷元帥の気分になって考え込む。家族が寝しずまりいよいよ戦争が始まる。ネズミは戸棚の中、風呂場や流しの影でコソコソ動き回りだす。猫が風呂場へ回るとネズミは戸棚から駈け出し、戸棚を警戒すると流しから飛び降り、中央にくると三方面から騒ぎ立てる。次第に疲れて眠くなった時、ネズミの一斉攻撃が始まった。

横向きに庇を向いて開いた引き窓から、また花吹雪を一塊り投げ込んで、激しき風のわれをめぐると思えば、戸棚の口から弾丸の如く飛び出したものが、避くる間もあらばこそ、風を切って吾輩の左の耳へ食いつく。これに続く黒い影は後ろに回るかと思う間もなく吾輩の尻尾へぶら下がる。瞬間の出来事である。……（棚の上へ飛び移ろうとしたところ）前足だけは首尾よく棚の縁にかかったが、後足は宙にもがいてる。尻尾には最前の黒いものが死ぬとも離れまじき勢いで食い下がっている。……（棚の上にいたネズミが）ここぞと吾輩の額をめがけて棚の上から石をなぐるがごとく飛び降りる。吾輩の爪は一縷のかかりを失う。三つの塊が一つとなって月の光を縦に切って下へ落ちる⁴⁶。

ネズミと猫の戦争は一気にクライマックスに至る。リズムカルで流れるような文章はあたかも平家物語を読んでいるようだ。猫の上に飛び乗ったネズミと引かなかった爪を外された猫とそのしっぽにぶら下がったネズミの三つの塊が棚から一つになって落ちる。次の棚のすり鉢も中にあった小桶とジャムの空き缶と一塊りになり、下の火消し壺を巻き込んで落ちる。半分は水甕の中、半分は板の間に転がり出て、深夜ただならぬ物音を立てる。最後に苦沙弥が昨夜の泥棒に懲りて準備していたステッキを振り回しながら、なんだ、誰だ大きな音をさせたのは、と大声で飛び起きてくる。その前に猫もネズミも皆四方へ退散済みである。こうして吾輩は猫の東郷大将と自負したにもかかわらず、ネズミの知略に完敗する。

（大和魂）

大和魂、と叫んで日本人が肺病やみのような咳をした。大和魂と新聞屋が言う。大和魂とスリが言う、大和魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂の演説をする、ドイツで大和魂の芝居をする。東郷大将が大和魂をもっている。魚屋の銀さんも大和魂をもっている。詐欺師、山師、人殺しも大和魂をもっている。大和魂はどんなものかと聞いたら大和魂さと答えて行き過ぎた。5, 6 間行ってからエヘンという声が聞こえた。三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。魂だから常にフラフラしている。誰も口にせぬ者はいないが誰も見た者はいない。誰も聞いたことはあるが、誰もあった者がいない。大和魂それ天狗の類か。⁴⁷

⁴⁶ Ibid., 第1巻第5章、p p 213—215

⁴⁷ Ibid., 第1巻第6章、p p 249—250

回顧すれば日露の戦役は連戦連勝の勢いに乗じて平和克復を告げ我が忠勇義烈なる将士は今や過半
万歳声裏に凱歌を奏し国民の歓喜何ものかこれにしかん・・・一大凱旋祝賀会を開催し兼ねて軍人遺
族を慰藉せんがため・・・義損あらんことをひたすら希望の至りに堪えず⁴⁸

苦沙弥はもちろん義捐金は出さない。彼にとっては元気なはずの大和魂は肺病やみのよう
な咳をする弱々しく見える。東郷大将の大和魂も今や魚屋の銀さんや人殺しまで誰もが持
つようになった。大和魂は大和魂さという同語反復は大和魂が実体がなくいつもフラフラ
していて、まるで天狗みたいなものだとか聞こえる。しかし後世の人々は、大和魂という
今日でも、愛国心をもってどんな状況においても秩序ある行動をする心情と考えているよ
うだ。もっと極端な人になると、天皇を敬って必勝の信念をもつという人もいる。殿様へ
の忠誠を誓った武士道は江戸幕府の崩壊で滅んだが、その精神だけは生き残り、昔の殿様
や先輩が天皇にすり変わり、天皇のためなら命も犠牲にし、赤貧にも甘んじるという精神
が延命しているように見える。特に一部の人々は、愛国心が天皇への敬愛に止まらず、そ
の番兵である中央官僚や軍隊、警察への尊敬にすり替え、武士の領主への奉仕精神を身も
心も犠牲にして天皇や国家に奉仕する精神にすり替えている。大和魂が独り歩きして当初
の姿をすっかり変えて人を驚かす巨大な幽霊になっている。

こうした風潮を形作ったのが日露戦争だった。日露戦争の目的は、韓国に対する日本の支
配権をロシアに認めさせることと満州からのロシア軍の撤退である。日清戦争で得た日本
の遼東半島支配に対して英仏露の三国による撤退勧告以来（三国干渉 1895 年）、露骨に中
国侵攻を進めていたロシアに撤収を求めた戦争である。戦争はM37 年 2 月に開始された。8
月からロシア太平洋艦隊の本拠地の旅順攻撃を開始し、半年の攻防の末M38 年 1 月占領。
次いで 3 月に奉天会戦で辛勝。5 月に対馬沖でバルチック艦隊の大半をせん滅した。勝利が
続いたものの犠牲も多くて、大国ロシア相手の戦争で日本は財政的にも軍事的にも限界を
迎え、アメリカが仲裁に入って休戦になった。ポーツマス条約では所期の目的は達成でき
たが、賠償金は得られなかった。当時の大国ロシアは経済力、軍事力、政治力など多くの
点で日本を凌駕していたが、国内でレーニンらによる共産主義運動の高揚で帝国自体が急
速に弱体化していた。それに対して日本は、西洋列強に追いつけ追い越せの単純なスロー
ガンで国民が一体となり戦争マシンのような体制をつくっていた。そのマシンの潤滑
油が「大和魂」による精神動員だった。日露戦争の勝利は、単に大国ロシアに対する勝利
にとどまらず、大和魂をもつ神国日本が開国後わずか 50 年で西洋列強と肩を並べる一流国
に成長した証明という役割をもっている。その精神主義が日本国民全体を熱狂させて国全
体に高揚した気分を生みだしていた。

⁴⁸ Ibid., 第 1 巻第 9 章、p 351

ネズミ退治作戦や大和魂の記述は、漱石が日露戦争自体をパロディー化したものではない。それほど漱石は戦争拒否者ではなかった。もともと猫が戦争を決意したのは、庸猫であり続けるには他の猫がするようにネズミと一大会戦をしないと身に危険が迫ったからだった。「大和魂」の例のように、周辺では日露戦争に勝利したといって大衆が提灯行列をする風潮になっている時に、自分も大衆と同じことをしていないと身が危険になるという危機感を漱石も感じ取っていたのだろう。猫は日露戦争の例にならって「ネズミ退治大作戦」を開始する。そのための戦略も東郷元帥に見習って種々立ててみた。しかし、日露戦争の場合と違って、ネズミ退治には見事に失敗する。だから猫の「ネズミ退治大作戦」は日露戦争を参考にして組み立てたがそれ自体をパロディーにしてはいない。失敗した猫の滑稽さは、精神主義で得た偶然的な勝利に対して戦勝気分にかかることを漱石がきっぱりと拒否し、踊らされる大衆とそうした風潮を煽る人々のバカさ加減と傲慢さを笑い飛ばしているように見える。

(4) 文明化しても心の平安を得られない人々

苦沙弥家へ集まったいつもの「太平の逸民」たちが終盤で大会議を開催する。はじめに、寒月が熊本の高校時代にバイオリンを独習したという話が延々続いて、最後に近所の山の上で練習しようと夜中に出かけたが、いざ到着していよいよ練習の段になると急に下の方でギャーという声がして怖くなって逃げ帰り、練習もできなかったという落ちがつく。その挙句に、寒月は「蛙の目玉の電動作用に対する紫外線の影響」の研究のためのガラス玉磨きも中断した。田舎で結婚式をすませてきたので、もう博士にもならないし、金田富子嬢との結婚話も止めた、という。とても回りくどい話の振り方だったが、寒月から結婚報告をされると、普段から世間体など気にもしなかった苦沙弥が、金田の方はどうするのか、金田には断ったかと心配し始める。金田側では探偵が大勢いるのもう知っているだろうから放ってあると寒月が言う。探偵という言葉聞いて苦沙弥は急に怒り出す。

苦沙弥が嫌う探偵は、不用意の際に人の胸中を釣る、知らぬ間に口を滑らせて人の心を読む、脅し文句をたくさん並べて人の意思を強いる人を指している。下司な探偵はすり、泥棒、強盗と同類でとても風上にはおけないのに、近年この連中が跋扈してきた。何故かという、探偵や泥棒は自覚心が強い、近代人もまた自覚心が強い、だから近代人は探偵、泥棒になるという論理で、苦沙弥は探偵が増殖してきたと思っている。だから、苦沙弥の周囲にはよく探偵が出没する。車屋のおかみさん、二弦琴の師匠、鈴木藤さん、向の下宿屋の学生などは皆探偵にみえる。

今の人々は個人の自覚心は自己と他人の間には利害の大きな溝があることを知り過ぎていることで、自覚心が鋭敏になればなるほど、人は自己の影を映してみないではいられなくなる。すると人は探偵や泥棒のように四六時中キョトキョト、コソコソし一刻の安心もできなくなる。⁴⁹

それを聞いた独仙が、続けて人が皆探偵のようになる原因が個人主義にあるという考え方に賛同し、その個人主義が人々の心をギスギスさせているからだと言明する。

昔は己を忘れろと言ったが、今では己を忘れるなというようになった、四六時中己の意識をもっていろと言うと心が太平になる時がない、いつでも灼熱地獄だ。文明が進めば殺伐感が薄れて個人同士の交際も穏やかになると言うがそれは大間違いだ。

次いで苦沙弥の自殺論、迷亭の「文明の未来記」が述べられる。これまでのように互いの意見を次の人が否定や反否定しあうのではなく、皆が一致して近代文明の弊害を述べあう。そこで各自の意見を列挙する。

苦沙弥が言う⁵⁰。文明が発展すると人は死を苦にするようになる。死を苦にするのは神経衰弱が発明されてからで、神経衰弱の国民には生きていることが死よりも苦痛だから、死を苦にする。死ぬのが嫌で苦にするのではなく、どうして死ぬのが一番よからうかと心配するのだ。死ぬことは苦しいが死ぬことが出来なければなお苦しい。その結果、自殺が奨励されるようになる。自殺が奨励されれば次に他殺も奨励されるようになる。すると、これまで国民の生命財産を守ると言っていた警官もこれからは国民を撲殺するのが仕事になってくる。

迷亭が言う。昔は領主や代官、戸主が人々を代表し、一般の人々に人格がなかった。いまはあらゆる人が個性を主張し、めったに人の身の上に手出しをしなくなった。これを突き詰めると、人と人の間の空間が狭まって生きていくのが息苦しくなる。こうして親子別居が生じる。次には離婚が進むことになる。夫婦とも個性を磨いているから賢妻になればなるほど朝から晩まで夫婦が衝突するようになって、夫婦別れになる。やがて同棲する人は夫婦の資格がないようになる。やがて結婚が文明のためと青年男女の個性保護のために蛮風と呼ばれるようになる。

東風が言う⁵¹。世の中で最も尊いものは愛と美。これが人々の情操を豊かにし、品性を顕

⁴⁹ *Ibid.*, 第1巻第11章、p 504

⁵⁰ *Ibid.*, 第1巻第11章、p p 510—511

⁵¹ *Ibid.*, 第1巻第11章、p p 520—522

にし、同情を洗練させて、人を慰藉し幸福にする。現実世界では愛＝夫婦、美＝芸術の形をとる。だから人類が続く限り、夫婦と芸術は滅びない。ここだけは迷亭が次のように反論する。芸術も夫婦と滅びる運命にある。個性の発展というのは個性の自由という意味である。個性の自由とはおれはおれ、人は人という意味だから、芸術が生まれる余地はない。芸術が繁盛するのは芸術家とその享受者の間に個性の一致があるからだろう。人々が各人ごとに個性をもつので、人が作った詩文などいっこうに面白くなるだろう。

独仙が言う⁵²。個性の自由を許せば許すほどお互いの間が窮屈になる。自由を得た結果不自由を感じて困っている。だから西洋の文明などはちょっといいようにみえるが結局のところだめなもの。これに反して東洋では昔から心の修業をした。そこでは無為にして化すという言葉が真理であると教えている。

苦沙弥、迷亭、独仙、東風の文明論が展開される。ここでは文明の恩恵に浴しながら人々が暮らして行く上で少しも生存の苦痛が軽減しないという近代文明のパラドックスを指摘しているのだ。漱石自身の文明論は後日「現代日本の開化」（M44年8月）の講演で述べられる。その要旨は、日本の文明開化は内発でなく外発的で、今の日本の文明は皮相上滑りな開化になっている。だからああせよこうせよとは言えないし、どうすることもできない。実に困った事態になったと嘆息しながら、時間はかかるかもしれないが、出来るだけ神経衰弱にならない範囲で内発的变化して行くしかないだろう、と述べている。私には、外発的な文明の告発とともに西洋文明に触れてしまった日本人への鎮魂歌のように聞こえる。

(5)「猫」の異議申し立て

「猫」はなぜ面白いのか？の視点から「猫」を読み直すことがこの論文の出発点だった。私はそれを「おかしくて笑える話」とセットになった「知的好奇心を高める話」という風に定義し、ジョークの先に我々の好奇心をかきたてる時代に対する異議申し立てがあることに気付いた。「猫」で見られる異議申し立ての要点は次の三点に集約できる。

第一は、文明化が進んでも精神の平和が得られないという異議申し立てである。「猫」は本郷に住むインテリの日常生活を再現している。しかもそれが今日の日常生活の光景と同じであることに驚かされる。明治のインテリの生活は経済的にも時間的にもずいぶんゆとりある暮らしぶりのように見える。しかしいったん家庭に目を向けると、夫をバカにしかかかると妻がきり回す家庭や俗物が横行し探偵がうろうろする油断ならない近隣に囲まれて気を休めるゆとりもない人々を見出す。文明開化で暮らしぶりは大いに向上したが、そこに

⁵² Ibid., 第1巻第11章、p p522-523

住む人々の精神はとげとげしい。文明が進めば人々は豊かさと精神の平和を得るはずだったのに、精神は一向に穏やかな気持ちになれないという異議申し立てがここにある。

第二は、お金持ちが偉ぶり知識人が尊敬されない拝金主義への異議申し立てである。誰もが立身出世を夢見ていた時代に一人ドロップアウトしていった漱石だったが、「猫」を書く中で気付かないうちに神経衰弱の自己治療していた。M39 年夏の「猫」脱稿以降「坊ちゃん」と「草枕」を書くと、まだ神経衰弱は完治していなかったが、作家になることを決意をし、M40 年 3 月東大、一高を辞職し朝日新聞社へ転職する大英断をした。漱石のように実力がある人だから冒険も可能かもしれないが、小説の苦沙弥は凡人だからそんな冒険は許されない。苦沙弥は知性こそ尊敬されるべきと考えて学者的孤高を誇ってきた。それに対して金田一党はお金と名誉が一番と考える俗物だが、拝金主義が蔓延した最近では彼らの方が社会的評価は高まってきたように見える。実績もない中学校の貧乏教師は、多分これから評価されることもなく転職もできずに社会的ダイレタントのまま教師を続けていくのだろう。知識や教養はお金や名誉とは別の価値の尺度で測るべきなのだ。それなのに、拝金主義のおかげで知性が尊重されず金持ちに大きな顔をさせていいのか、と異議を申し立てている。

第三は、個人主義の急速な進展に対する異議申し立てである。

日露戦争の勝利で戦争美化や精神主義礼賛が勢いを増していた。それに対して英国留学の経験を持つ漱石は、人々の時局迎合主義や場当たりの態度を軽薄な風潮と見ていた。そしてある日、そのような精神的態度は日本が「文明開化」を外発的に受容してきた影響ではないかと気付く。西洋文明の受容は確かに主体的ではなかったが、その間に日本の資本主義は進展し、西欧とは一味違う日本の特殊性を帯びた資本主義のもとで人々は日増しに西欧的な個人主義の道を進んでいる。漱石はこのまま行くと迷亭の「未来記」の通り、本当に親子別居や夫婦別居が始まり、自殺が当たり前の社会になるのではないかと不安を覚える。急速に進む個人主義の先行きが見えない不安に異議を申し立てるのである。

これらの「猫」の異議申し立ては、とりもなおさず明治の近代化に対する漱石の異議申し立てに他ならない。近年では明治時代礼賛論が幅を利かせて、日本の近代化の明るい面ばかりが強調される。例えば岩倉使節団についてその実態は約 1 年半をかけて西欧諸国を団体で観光旅行したものだったが、ある人々は使節団がどの国へ行っても威風堂々としていて、昇る朝日のように元気な日本を紹介してきたと説明する⁵³。大名旅行中の使者が理由もなく卑屈になる必要はないが、それを威風堂々としていたと読み替えるのはあまりにも作為的ではないだろうか。お目出度い明治時代礼賛論にも何でも反対する否定論にも与しないで、「猫」で見られる異議申し立ては明治の一流の知識人が同時代に生きる中で提起した問題点だから、これを真剣に議論し、解決に向けた正しい道筋をつけて閉塞感ばかりが強

⁵³ 泉三郎「堂々たる日本人―知られざる岩倉使節団」(祥伝社、1995 年)

い我々の時代の展望を切り開く糧にしたい。

資料 1

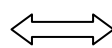
夏目漱石年表

西暦	和暦	年齢	内 容
1867	慶応 3	1	1/5 夏目直克 54 歳、妻ちえの四男として金之助誕生(新宿喜久井町)。生後直ちに四谷の古道具屋へ里子へ出される。
1868	明治 1	2	
1869	2	3	11 月塩原昌之助の養子になる。(新宿)
1870	3	4	
1871	4	5	養父塩原が浅草諏訪町へ移転。この頃疱瘡を病む
1872	5	6	
1873	6	7	
1874	7	8	養父塩原が養母や巢と離縁。秋、浅草・戸田小学校へ入学
1875	8	9	
1876	9	10	養父が金之助を給仕にしようとしたため、長兄が喜久井町の実家へ引取り。新宿・市谷小学校へ転校。
1877	10	11	
1878	11	12	10 月錦華小学校卒業
1879	12	13	府立第一中学校入学(神田一ツ橋)
1880	13	14	
1881	14	15	中学を中退。二松学舎で漢学を学ぶ
1882	15	16	
1883	16	17	成立学舎へ入学
1884	17	18	9 月大学予備門予科へ入学
1885	18	19	
1886	19	20	学校落第
1887	20	21	3 月長兄大助死去、続いて中兄栄之助死去。同宿の中村是公ら 7 人で江ノ島遠足
1888	21	22	1 月塩原家から復籍し、夏目姓へ戻る 7 月第一高等中学校予科を卒業し、本科へ入る
1889	22	23	
1890	23	24	7 月第一高等中学校本科卒業、帝国大学入学(英文学)。9 月箱根旅行
1891	24	25	夏、富士登山(中村是公、山川信次郎が同行)
1892	25	26	4 月分家し、北海道岩内へ転籍。7 月岡山へ旅行。早稲田専門学校で教鞭
1893	26	27	7 月帝国大学卒業、大学院入学。10 月東京高等師範で英語教授

			日光旅行 円覚寺で参禅
1984	27	28	春肺病の疑いで療養。 8 月松島旅行 10 月小石川宝蔵院へ下宿
1895	28	29	4 月東京高等師範を辞職し松山中学教員で赴任 12 月中根鏡子と見合い。この頃俳句に専念し正岡子規に添削指導を受ける
1896	29	30	1 月松山へ戻る。4 月第 5 高等学校教授で熊本へ赴任。6 月結婚。9 月妻と大宰府旅行
1897	30	31	6 月遅々直克死去。7 月上旬。夫人流産し鎌倉で療養。 9 月単独で熊本へ帰る(10 月夫人も帰る)。
1898	31	32	
1899	32	33	1 月耶馬溪、日田旅行。5 月長女筆子誕生。9 月阿蘇登山。
1900	33	34	6 月英国留学決定。7 月上旬。9 月横浜出航。10 月末ロンドン到着。
1901	34	35	1 月次女恒子誕生。
1902	35	36	9 月この頃神経衰弱発症 10 月スコットランド旅行。12 月帰国へ
1903	36	37	1 月神戸着 4 月第一高等学校教授 同月東京帝大講師(小泉八雲の後任)。 6 月頃神経衰弱再発し、一時妻子と別居。10 月三女栄子誕生。この頃から水彩画を書く
1904	37	38	夏・黒猫を飼う 秋明大講師を兼任、12 月「吾輩は猫である」執筆開始
1905	38	39	M38 年 1 月～M39 年 8 月ホトギスへ「猫」連載。12 月 4 女愛子誕生
1906	39	40	1 月「趣味の遺伝」、4 月「坊ちゃん」、5 月「漾虚集」、9 月「草枕」、 10 月「二百十日」、12 月本郷西方町 10 番地へ引越し
1907	40	41	1 月「野分」。3 月京阪旅行。4 月教職を辞職して朝日新聞社入社。 6 月「虞美人草」開始。同月長男純一誕生。9 月早稲田南町 7 番地へ引越し
1908	41	42	1 月「坑夫」開始。6 月「文鳥」開始。7 月「夢十夜」開始。 9 月～12 月「三四郎」連載。9 月猫死す。12 月次男伸六誕生。
1909	42	43	6 月「それから」掲載。8 月胃病。9 月満韓旅行
1910	43	44	3 月「門」開始。同月五女雛子誕生。6 月胃潰瘍で入院。8 月修善寺の大患。11 月帰京直ちに入院。10 月「思い出すこと」開始。
1911	44	45	2 月博士号辞退。2 月退院。6 月諏訪旅行。8 月関西で講演後胃潰瘍再発で入院。9 月時で手術。11 月辞表提出したが撤回。11 月 5 女雛子死去。
1912	明治 45 大正 1	46	1 月「彼岸過迄」開始。7 月明治天皇崩御。8 月塩原日光軽井沢旅行。 9 月痔手術。12 月「行人」開始。
1913	2	47	1 月神経衰弱再発。3 月胃潰瘍で臥床。
1914	3	48	9 月「心」開始。10 月胃潰瘍で臥床。
1915	4	49	1 月「硝子戸の中」開始。3 月京都旅行。潰瘍再発で臥床。4 月帰京。 6 月「道草」開始。11 月湯河原旅行。
1916	5	50	5 月「明暗」開始。11 月大出血。12/9 死去。12/10 解剖。12/12 葬儀

(注)  M37 年暮れ～M39 年夏までの約 1 年半の間に漱石は「猫」を執筆した。

 M37 年暮れ～M38 年秋までの 10 ヶ月間の出来事が「猫」に描かれた。

 M37 年夏～M41 年 9 月までの約 4 年間、黒猫は夏目家で暮らした。